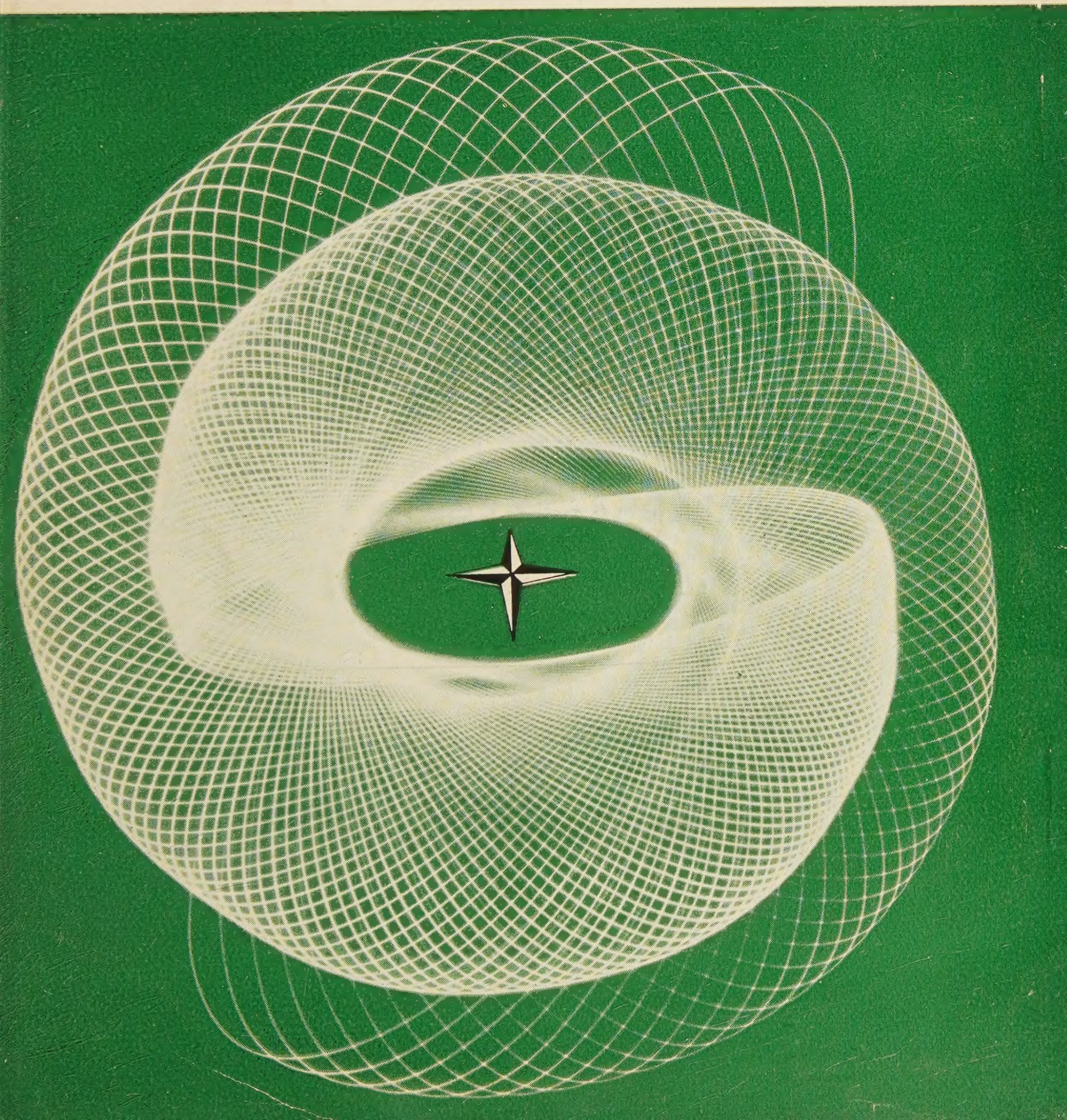
UT OMNES UNUM SINT

学生キリスト者／6

特集　ストラスブール世界会議





季刊 **学生キリスト者** 第6号

（一九六一年三月）

目次

教会の生命と使命

The Life and Mission of the Church

季刊「学生キリスト者」の目的

1. 日本における学生キリスト教運動（S. C. M.）を強力に推進するために
   (1) 統一学生キリスト教運動を確立し
   (2) 各大学のキリスト者共同体を強化し
   (3) 学生の福音理解の深化を目指す
2. 大学における「教会の生命と使命」の具体的展開のために
3. 教会の更新と一致のために

動の使命を探索しようとするテーマ、これらは、単なる偶然的な組み合せではなく、過去の歴史の中に働き、古い殻を破って、現実の使命に、わたしたちを立ちむかわせる聖霊の働きとして深い意味をもっていたと思う。

ストラスブルグの協議会に出席したものの一人として、いまこゝに、フランスやヨーロッパの興味深い風物を叙述したり、共に学びあった人々―たしかにそこには優れた世界の指導者たちが多く集っていたが―の印象などをこゝに述べようとは思わない。また、協議会全体についての細部にわたる報告をなそうとするものでもない。わたくしは、全体会議における講演の一つと、大都市における教会の責任を考えるゼミナールに出席し、また毎晩学生諸君がそれぞれの学習(トゥトリアル)グループに分れたとき、集った指導者達のゼミナールがもたれ、その連絡係を、ニュービギン監督とし、タッカー牧師とともに務めた。このような点から、他のグループやゼミナールでどのような討議がなされたか熟知していない故に、ストラスブルグ協議会全体について語ることは困難である。そこで、わたくしの具体的に体験し学んだ点からストラスブルグ協議会が、今後の日本における学生基督者運動に投げかけている課題について、二、三の印象と焦点を述べさせていたゞきたいと思う。

第一に指摘したいことは、ストラスブルグ会議は、世界学生基督者連盟が一九五八年より五ヶ年間にわたってなしつゝある「教会の生命と使命」(LMC)についての研究と実践の一環をなすもので、全体を通して、右の主題について根本的な神学的検討をなす点に重点がおかれていたことである。このことは、ほとんど時を同じくしてスイスのロザンヌで開かれたヨーロッパの教会青年の大会と比較するとはっきりしてくる。すなわち、ロザンヌの大会はストラスブルグの会合にくらべるなら、はるかに実践的であり、活動的であった。ストラスブルグはそれに対して、理論的、神学的な傾向が強かったと思う。理論的であるということは、決して抽象的であるということではなく、本質的であるという意味である。いかなる活動的な実践も根本的な神学的基盤なしには、空廻りする車のようにエネルギーの消耗に終ってしまう。それ故に、ストラスブルグ会議が知的な、また本質的な神学的検討をなすという研究的性格の強かったことは、実践を軽んずるということではなく、実践を生み出し、たえずそれを支えてゆく神学的な基盤を互に学びあうという点から評価されなくてはならない。とくに、ストラスブルグ会議は大学共同体に学ぶ「学生キリスト者」の会合であり、知的な学究的傾向が強かったことはむしろ当然であった。それは、非常に広汎な領域にわたるものであり、言語の障害もあって、容易に理解されがたく、いさゝか知的消化不良(Intellectual Indigestion)のきらいさえあった。数多く開かれたこの種の協議会で、ストラスブルグ会議ほど研究資料の点においてよく準備



ストラスブルグにおいて提出された課題

竹中正夫

ストラスブルグ会議の性格

ストラスブルグはフランスのアルサス地方にある古い大学町であり、中世から伝わる大寺院を中心に、いくたびかの戦乱にも拘らずいまも残っている古風な建物や家々の装いなどに古いヨーロッパの歴史を感じとることが出来る。このストラスブルグで世界学生基督者連盟の「教会の生命と使命」についての世界の学生基督者たちによる研究協議会は昨年七月十五日から二週間にわたって開かれた。主な会場となったのはストラスブルグ大学の工学部の講堂や教室であった。講堂からゼミナールのもたれる教室にゆくとき、わたしたち門外漢には判別のつかない、巨大な実験機械のおいてあるガラス張りの研究室の横を通ってゆくことが多かった。千年をこえる文化的歴史的遺産をもつこの古風な都市を背景として、二十世紀の中葉において最尖端をゆく工学部の近代的造形にみちた建物を会場として今回の協議会が開かれたことは興味あるコントラストである。世界の殆んどすべての地域から、七十ヶ国を越える国々の学生キリスト者運動に携っている代表者たち約七〇〇人がそこに参集した。その主題は「キリストのこの世にたいする聖務（ミニストリー）と今日におけるわれわれの使命」(Christ's Ministry to the World and Our Calling Today) という課題であった。

この三つの組み合せ、すなわち、古い伝統と歴史をもった都市、急激な現代の社会的技術的革新を象徴する会場、そして、世界の各地からそこに集った人々が、キリストのこの世界に対する聖務の理解に根ざして、現在の学生キリスト者運

らぬこと（Secular involvement）が強調されたことを指摘したい。このことは、たゞちにキリスト者が社会的活動に乗り出し、手放しで社会的渦巻きの只中に身をおくことを意味しない。もちろん、そこには、「然り」を「然り」とし「否」を「否」とする主体的な態度が必要である。たゞ重要なことは、いかに、キリスト者が社会的な問題にかゝわるかという個々の技術的な方法の検討をなすまえに、この世界にたいする神学的理解を深くし、この世に生きるキリスト者の根本的態度を把握することであるとおもう。このことは、会議のはじめになされた、ニュービギン監督の「神はこの世をかくまで愛された」という講演や、D・T・ナイルス氏のこの世にキリスト者が遣わされてゆくときに、いかなる姿勢をもって生きるかという問題の提示にもあらわれていた。キリスト者は、この世のすぎ去ってゆく姿、ほろんでゆく姿を充分知りながらも、この世からのがれて生きるのではなく、また、この世に敵対して闘うのでもなく、この世の救のために、この世のためになされている神の聖務に与るべく、この世にあって働くことをやめないのである。これは二重の回心を意味している。第一は、この世につけるものから自由となること、この世的な権力や物力や人間の力に究極的な望みをもたない人となることである。こういう点から、キリスト者は、この世と安易な妥協をしたり、この世に属さぬものである。パスカルのいうごとく、「（初代のキリスト者たちは）要するに、教会にまったく身をささげるため、つまり二度目の誕生を果すために、最初の誕生にあずかったこの世を離れ、あきらめ、この世と縁を切りました。そうしてこそ、この世と教会の間には、おそろしい違いがあることにも気がついたのです。」（「病と死についての冥想」新教出版社五四頁）

しかし、キリスト者はもう一つの回心を必要としていることを忘れてはならない。それはキリストの愛されたのは神の創造されたこの世界であり、彼の聖務（ミニストリー）は、この世の人々の中に今もおこなわれているということである。そして、教会とキリスト者はそのキリストの聖務（ミニストリー）に参与するために、この世に再び遣わされているということである。この点から、世俗の世界にキリスト者は参与してゆくのである。

こうした観点から、信仰を保ってゆくということにおいてさえ非常な困難な中にある共産主義の国々からきた人々の発言は注目すべきものがあった。東独から来た、エリザベス・アドラー女史は、信仰の自由さえ圧迫されつゝある中で、キリスト者は無言で時代のなやみを共にする態度でこの世に生きることを語り、ロマドカ教授も、キリストを否定する世界でキリスト者として自分はどう生きているかという悩みにみちた問いをもって感銘深い説教をされた。

わたしたちが考えなくてはならないことは、彼方におけるキリスト者のこの世における生き方に刺激されつゝ、この日本の大学協同体の中で、キリスト者学生はいかに生きるかと

されたものは少なかった。「明日の宣教の課題にたいする歴史の教訓」(History's Lessons for Tommorrow's Mission, 1960)や、すでに菅円吉氏によって訳された、ヴィサー・トーフトの「新しき教会の生命と使命」(The Pressure of Our Common Calling, 1959)のほかフランスの若い神学者、F・フローレンティン女史によって書れた、主題についての聖書研究のテキスト(Five Bible Study Outlines on the Life and Mission of the Church)や、二十に及ぶ各ゼミナールの資料など、いづれも今日のエキュメニカル運動のなかで考えられて来た神学的検討の結果を反映しているものである。また会議においてなされた講演の多くは、聖書神学、初代教会の歴史、宗教改革の精神、そして、現代における教会と世界の理解についての基本的、原理的検討をなしたものであった。これらは必ずしも一つの線に沿っているものでなく、むしろ多くの異った背景や強調点をもちつゝも、キリスト教信仰の深い神学的、歴史的理解にたちかえることを通して、現実における「教会の生命と使命」を学ぼうとする点に、共通した一致点をもっていたと思う。おそらく、今世紀における世界の教会の半世紀の歴史のなかで、最も顕著な出来事は、教会の合同が進んだとか、社会的な実践がなされたとか、あるいは、キリスト者の数がある地方で急激に増加したというようなことでもなく、聖書神学をはじめとして、この世に対するキリストの和解の聖務（ミニストリー）についての神学的復興がなされつゝある事実であると思う。とくに、キリスト者学生は、新らしく見出され、展開されつゝある神学的賜物に対して無知であってはならない。若い青年としての情熱と鋭い感受性をもって現実の姿に不満をもち、批判的であればあるほど、深い知的な研鑽をもって、新らしい行動の基礎を探求しなくてはならない。このことは、必ずしも、みんなが専門的神学者になることを意味しないし、難解な神学用語をきりまわす、いわゆるエキスパートになるのでもない。キリスト者は、それぞれ、啓示の光の下に自分達の信仰についての正しい理解をもっていなくてはならない。それがよし、どんなに素朴な表現をとるものであっても。

この点から、わたしは、ストラスブルグ会議の最も大きな貢献は、長い眼からみると、右にあげた資料や、なされた講演や、やがて出される各ゼミナールの報告書などによって指示される「教会の生命と使命」についての基本的な神学的理解にあるのではないかと思っている。一つの協議会の成果を簡単に評価することは出来ない。ストラスブルグ会議のように、可成りの広汎な領域における地道な理論的検討をなした協議会においては、長い時間の経過の中にその意義が再評価されるものであると思う。

第二にストラスブルグ会議においてたびたび強調された課題として、キリスト者が世俗の世界にわけ入ってゆかねばな

れたからである。それゆえわれわれは、神は教会を今の時代に孤児とすることはないであろうということを希望する充分な理由を持つ。」(「教会の革新」新教出版社一〇四頁)と述べている。(なお「教会の革新」については、拙稿「転換期における宣教と牧会」日本基督教団信仰職制委員会編、および「現代における教会の革新」福音と世界一九六一年一月号を参照されたい。)

ちょうど、一九世紀の後半から二十世紀のはじめにかけて、世界の教会が困難な障壁につきあたり、保守的な現状維持の姿勢が強くあったとき、新らしい道をきり開いてゆく開拓者の役割を、教会の一致や外国伝道や、社会的実践の分野に、学生キリスト者が果していったように、今日の教会の革新の過程に、若いエネルギーと知的な洞察力をもって、学生キリスト者が創造的な働きをなすことが期待されていると思う。

第三にストラスブルグ会議において提出された問題として教会の一致について考えてみたい。前記のロザンヌの青年大会では教会の一致の問題が正面から取りあげられたが、ストラスブルグでは、それがあまり表面にあらわれなかったことは確かである。もちろん、D・T・ナイルスやヴィサー・トーフトの講演には教会の一致の問題についての鋭いチャレンヂが含まれていた。

ロザンヌの大会を了えてストラスブルグに来たWCCの青年部幹事フィリップ・ポーター氏(彼は、ジャマイカでかつてSCMの幹事をしており、WSCFの新委員長に選出された)を囲んで一夕指導者のゼミナールがもたれた。

彼によるとロザンヌの大会の中心点課題の一つは、インター・コミュニオン(ちがった教派に属するキリスト者が一つの聖餐に与ること)の問題であった。かれらは、一般的にインター・コミュニオンの是非を論じたのではなく、教会の正式の代表として集った青年達が、二週間共同の生活を共にし、聖霊による一致を体験したとき、自発的に、なぜわたしたちは、最も喜びとする主の聖餐に与ることが出来ないのであろうか、ということを真剣に考えるに到った。つまり、そのような状況において、インター・コミュニオンを妨げる神学的正当性はなんであるかということが課題であった。英国国教会に属するキャザリン・ブリス女史はそれにたいし、聖餐が共に出来ないのは、使徒伝承の立場から出来ないと述べた。しかし、彼女は、休暇中、スイスを旅行していたとき、スイスの農村の改革派教会の教会で聖餐にあづかることは特殊な場合として許されているといった。こういうことを考えるときに、インター・コミュニオンを阻止している原因の中に、神学的要素とともに、多分に非神学的要因(Non-Theological Factor)が含まれているのではないかと考えさせられた。

ストラスブルグの会議でも、ある日曜日の朝、会議の参加

いう課題である。この点において、日本の「教会の生命と使命」の強調点の一つとして、「大学問題」が再びとりあげられつゝあることは、正しいことであると思う。

第三にストラスブルグ会議において強くあらわれた傾向の一つは、制度的教会や伝統的な宣教運動を担当して来た諸団体にたいする批判が強かったことである。これはいわゆる、教会および宣教団体（Missionary Societies）の制度化（Institutionalism）にたいする批判である。この批判的精神は今日変革しつゝある社会的状況において、聖書の光にてらして、教会とキリスト者の在り方を真実に考えようとするものにとって、おさえることの出来ないものである。今日、教会は世界の各地において、一つの壁にぶつかっている。変革しつゝある世界にあって、旧態依然たる形態や機構を教会はとっていてはならない。一昨年夏ギリシャのテサロニカにおいて開かれた「急激な社会変革」についての世界教会協議会の報告書は次のようにこの点についてのべている。

「今日教会の交りは、現代人の共同体にたいする求めに充分こたえるものでない。多くの場合、それらは、過去の時代において重要であった要請から生れて来た機構であったり、特定の階級やグループの必要性に答えて来たものであった。……教会は変革しつつある社会の状況を充分に理解し、孤独とそして困惑した状況にある現代人に新らしい共同体を形成してゆくような実験をなす勇気をもっているだろうか。」(Dilemmas and Opportunities, Christian Action in Rapid Social Change, 1959, p.35 邦訳「社会変革のなかにある教会責任」新教出版社）

わたしたちは、単に教会の古い制度的な機構の壁を外側から批判する否定的な態度におち入ってはならない。H・ウェーバーのことばによると、

「幸いにも、神は、世界歴史の嵐が幾度も教会をゆり動かして、破滅に直面せしめるさまを承知しておられる。しかし、また、その同じ、神が、聖霊の働きによって、しばしば、古い形式の中に新しい生命を注ぎたもうのである。神はわれわれに、新しい恩寵の賜物を与え、世界における教会の奉仕を全うさせるために、新らしい機構をも与えて下さるのである。」（「信徒・教会・社会」、教団出版部、二八—二九頁）

この点において、わたしたちは、聖書における教会の理解を学ぶに慎重であるとともに、現実の教会の内側から、その革新のために実験的試みをなすに勇敢でなくてはならない。とくに、若い情熱と真摯さをもつ学生キリスト者達の中からそうした実験的な試みがなされることが期待されている。われわれ人間が教会を変革するのではなく、それをなし賜うのは神の働きであり、わたしたちは神の命にこたえて、その器となって彼に身をゆだねて働く用意をすることが必要とされている。

教会の革新について、ヴィサー・トーフトは

「教会を造り、それに新しい命を与えた主は、教会がこの世的になることから不断に救い出すということも、等しく必然的である。教会は新たにされねばならない。なぜなら、教会は新たにさ

というキリストの祈りに真実に応答するものとして、現実の教会はあまりにも固陋であり、しばしばキリスト者はわかれわかれになっている分離や分裂の状態にたいして無関心であったりさえしている。キリスト者相互の中に真実な理解と一致と協力のないとき、どうして、この世にたいして、人々の間の和解を証することが出来るであろうか。

わたしは、この点において、アジアの教会に課せられている責任が非常に大きなものであることを痛感する。今日、西欧の教会では、一致の必要性は認識されても、一致をなすための具体的な道は容易ではないと思われる。もちろんそこには、神学的な見解の相違もある。しかし、他の非神学的な要素が具体的一致の妨げとなっている。西欧の教会は、長い歴史的伝統の重荷をもち、また、尨大な制度的機構をもち、容易に身動きが出来ない状況にある。アジアの教会も直接に、間接にそうした西欧の教会の影響を受け、無意識のうちに分裂や「隔ての中垣」をキリスト者の間につくり出している。もちろんアジアのキリスト者の不一致の原因をすべて西欧の教会の責任とすることは誤りである。たとえば、アジアの人間と人間の関係に存する封建的な恩義の観念や、狭偏な派閥、学派、地方閥などの意識が、キリスト教の共同体の中に知らず知らずのうちにもちこまれていることも事実である。しかし、アジアにおいてキリスト者は少数者であり、またその歴史は比較的浅く、今日それぞれの国々の指導者を自らの中から輩出して自立的な運営をなそうとしているとき、一致の課題が新約聖書における教会の理解にたちかえって、新鮮に検討される機会があると思う。この点において、日本の学生キリスト者の運動の中に、不一致の現状にたいするはげしい心痛のおもいと深い悔改めがなされ、一致にたいする大胆な探索がなされるべきではないかと思う。

第四にストラスブルグの協議会が投げかけている根本的な課題は、一人一人のキリスト者学生が真にイエスキリストにであい彼と共にこの世に生きているであろうかという課題である。世俗世界における宣教の責任も、制度化の課題も、また、一致の問題も、この点を抜きにしては、なんら進展するものでない。「われわれは、イエス・キリストとであい、日々に新らたにこの世界の中で生きているであろうか」とD・T・ナイルスが問うたとき、少からずの参加者達は、自分自身に次のような問を投げかけたにちがいない。

「それは、ボクの大学における毎日の生活においてどういう意味をもっているだろうか」

制度的教会や宣教団体に批判的となるが、果して自分は、イエス・キリストを主として生きているだろうか。悔い改めと更新を必要としているのは、外的な制度ではなく、他人でもなく、まさにこの私自身であるといったおもいをもったものが少くなかったと思う。

者がストラスブルグの改革派の教会の聖餐式に招かれたことがあった。これは、会議の公式の聖餐式として全員に強制力をもつものでなく、参加者はすべてその教会の聖餐式に招かれているという形でなされた。幾度かの戦乱によって破壊された古い会堂であった。聖餐式はヴィサー・トーフト博士、ニュービギン監督、ピーター・クライシイヒ牧師そして日韓を結ぶ李さんなどの世界の指導者によっておごそかに執行された。わたしは、かつては、ローマ・カトリック教会に属していたこの教会の会堂で、この町の人々とそして世界のすみ〴〵から来た、ちがった国々と教派に属する学生キリスト者達と一つの主の聖餐を共にすることに一つの感激を覚えた。

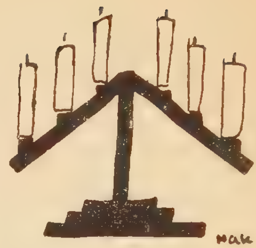
それと同時に、他の点には、一つとなって祈り、学び、共同の生をもつことが出来ても、この聖餐を共に出来ない兄弟たちがわれわれの間にいる事実に心痛むおもいがした。

この聖餐式とは別に、英国国教会に属する人々は、早朝にかれら丈の聖餐式をもった。ところが、その人々たちの中にも、いろいろのタイプがあった。大別すると、

一、英国国教会の聖餐式にも改革教会の聖餐にも出席し両方で受餐した人。
二、両者に出席したが前者の聖餐にのみ与つた人。
三、前者にのみ出席、受餐し、後者には全然出なかった人。
四、前者に出席せず後者に出席し受餐した人。
五、前者に出席せず、後者に出席し受餐しなかつた人。

この他にもいろいろな態度があげられると思う。こゝで問われることは、こうしたちがった態度がインター・コミュニオンにたいして一つの教派に存することには、どういう神学的説明がなされるべきであろうか。また、同じ改革派に属している教会、同じ信仰告白を内容とする教会でも、今日別々の教派を形成している事実がある。たとえば、人種、言語、国籍の相異から教会が分れたり、外国伝道をなしていった人々との人的、経済的関係からいろいろの教会が生れたりすることが多い。これらは、主として、神学的要因における不一致ではなく、むしろ、社会学的な非神学的な要因に基づく不一致であり、現在の教会は、この二つを区別し、後者に基づく不一致を出来る丈徹廃する責任があるのではないかと思う。

教会の一致の主張と希望がなされはじめてから、すでに幾十年かの歳月がたった。その間、徐々ながら、南インド合同教会やカナダの合同教会、そしてフィリッピンの合同教会のような顕著な例をはじめ、米国の長老派の二大教会の合同や合衆派と福音・改革派（E&R）の合同教会などが成長しており、国家主義的弾圧のもとであったとはいえ、日本基督教団の形成もこれに加えられるものといえよう。これらのキリスト者の一致への努力は、聖霊の大きな働きに応えた僅く小さな反映にすぎない。「これ、みな一つとならんためなり」



この世の教会の使命

N・サーバー

教会の使命の中心的な問題の一つは、この世界に対する関係であります。過去三〇年の間、教会の使命を主に考えてきた神学者たちは、この問題に注意を集中してまいりました。その結果は、社会における教会の生命と使命についての根本的な新しい理解となってきているのであります。

この夏、フランスのストラスブールで開かれた世界学生基督教連盟の、教会の生命と使命についての会議において、この問題に対して大きな注意が向けられました。ストラスブール会議の中心的な問題の一つは、教会のこの世界に対する関係でありました。この会議で発表されたこの問題についての考え方を、いくつか皆さんとともにわかちあいたいと思います。

東南アジア基督教協議会の総主事で七年間連盟の議長をしておられたセイロンのD・T・ナイル博士は、「キリスト者の生活の究極的事実であり目的であるものは、単に個人の救済であるばかりでなく、新しい天と新しい地の創造であり、各個人の救済はこれに関わることなのです。私たちはこの世が、キリストの御心に対して完全に従順になるまで、神の世界における神の民となるように召されております。教会の使命は、キリストの主権の上に基礎を置いているのです。」と、ストラスブール会議の指導者たちの一般的意見を以上のように述べられました。

キリストの主権についての聖書的基礎には、これまでもかなりの注意が払われてきました。中央ブラジルの中央教会の神学校長である、リチャード・シャウル先生は、エペソ書に見られるキリストの二つの主権の概念を指摘しました。キリストは創造の仲立ちであり、この世界を支える原理であります。人間を亡ぼす脅威となるすべてのものに対する勝利もまた、彼によって得られてきたのであり

この点から、ロマドカ教授がなした説教は参加者に一つの感銘と反省を与えた。それは政治的問題を論じたものでもなく、社会的責任を説いたものでもなく、キリスト教信仰を否定するかにみえる困難な状況のたゞ中において、自分の立つ信仰の意味を聖書の音信にきくという実存的なものであった。わたしは、やゝ長きにわたるが、彼の説教の一節を引用させていたゞき、この報告書を結びたいとおもう。

『われわれのキリスト教信仰は、もはや、既成の教会の中においてさえ、あたりまえのこととして受けとることの出来ないものとなっている。われわれはさまざまな古い世界が変革し、分裂している時代に住んでいる……こうした状況にあって、われわれは重大な質問に直面している。「われわれは、イエス・キリストが贖主であることの意味を充分深く理解しているであろうか、ナザレのイエスとは誰であろうか」わたしは、このことをわたしをめぐる世界に対していっているのではない。それらの人々はキリストとの交りと他のキリスト者達との交りにもはや生きていない。わたしが問うているのは、わたしたち自身にたいしてである。わたしたちは、イエス・キリストの証人であり、彼の贖いの業の証をなそうと努めている。しかし、わたしたち一人一人は、イエスが誰であるかを確かに知つているであろうか　わたしたちは、イエスをわたしたちの生活のデコレーションにしたり、儀式やカレンダーや敬虔な言葉にのみ彼を限定していないだろうか。

この点に関連して、わたしたちは大事な問をもつ。「わたしたちはナザレのイエスをわたしたちの教会やキリスト教の伝統が支配している領域の外側に理解させるに充分な内的なちからをもつているだろうか。わたしは、他人のことをいっているのではない。夜となく、昼となく、わたしは自分自身にこう問うている。「わたしは、わたしの国の多くの異教徒の人たちに、イエス・キリストがなにを意味し、彼が贖主であり罪の赦しがリアルとなっていることを理解させるために、適切なそしていきいきとした言葉をもっているだろうか」と。わたしはしばしば、心がうめくような悶えるおもいを覚える。それは、福音をきこうとしない世界不信や無関心な知識人や無神論者達について悩むのではなく、むしろわたくし自身が、人々にたいしてイエスについての証をなし得ない姿について悶え苦しむものである。」

わたくしたち一人々々がこうした問いを自らに鋭くなし、再び新らしく聖書の使徒の中にナザレのイエスの誰であるかを把握し、彼にすべてを任ねて従うことが、すべてのはじめに来り、またおわりに来るものであることを深く学びたいと思う。

（同志社大学神学部助教授）



が授けを受けられ、続いて[illegible]キリスト教の信仰者となりました。

しかし教会は、社会の現実的な問題以上に、各個人により多く関わるものではないか、と言われてきたのです。確かにこれは過去数世紀においては、真実でありました。教会は、社会的、政治的問題については触れることが少ないものと考えられていたのであります。然し、この二、三〇年間に、多くの教会がこの点で変革を成しとげてきました。私たちは、マルクス主義からあることを学んできております。即ち不正とか、貧困とか、飢餓とかいうものは、私たちの招かれている神に対する応答の生活をするための重大な障害と成り得るということ、従って教会は個人に関心を持つのみでなく、同様に社会に対しても目を向けなければならないということであります。

責任社会という言葉がこの関心を要約するために用いられています。ここには三つの重要な意味が含まれています。すなわち

一、私たちは、それ自体一つの目的と考えず、神に対して責任を負うところの社会のために働くのであります。

二、私たちは、社会のあらゆる部分、また社会全体が、社会の成員総ての幸福に対して責任を感じるような社会のために働くのであります。

三、私たちは、すべての人間が責任ある人間として、自由な存在として生活することの出来る社会のために働くのであります。

社会における教会の使命をはたすための信徒の役割について、オランスのベネディクト派、神学校長であるジェローム・ハマー神父が、次のように言明しました。（この人はこの会議の講演者として、バチカンから推薦されてきた人でした。）

ハマー神父は、信徒によるこの世の教会の使命についての基礎として、ペテロ前書二章をあげました。「あなたがたは選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神に属する民である。それによって、暗闇から驚くべき光に招き入れて下さった方の御業をあなた方が語り伝える為である（ペテロ前書二の九）。教会は宣教の使命を持った人々の群であります。この群に加入することによって、洗礼を受けた人はすべてこの使命を負うのであります。このような人に期待されるのは決して説教ではなく、彼の生活における証なのであります（ペテロ前書二の一二）。それはキリスト教信者としての日々の生活のことであります。宣教者が言葉で福音を述べることが、人々を神の世界に導くことの出来る唯一の方法ではないのであります（ペテロ前書三章一―二）。

この世界は神が望まれたから存在しているのであり、神はそれを人間に預けられたのであります。この世界において、住宅問題の改善、労働における安全性、健康や仕事と物品のより公平な分配、国際的共同社会の推進、芸術と文化の発展、科学的探究ということに信徒が働くということは、欠くべからざる事であります。真のキリスト者なら、人を回心させようとする下心もなく、自らを全くこういった任務に献げるでしょう。

このように働くことにおいて、キリスト者は神の仕事を果しているのであります。このような仕事をすることにおいて信徒は、自分の洗礼によって与えられた祭司職を果すのであります。神の民の全部が、人類全体に奉仕とか、自己献身とか、その行為とか、同胞愛

ます。教会の首であるこの同じキリストが分裂した社会において、人間の体と同じように現実的である一つの新しい人間生活の組織を造っているのです。その組織がすなわち教会です。この教会において人間は、自分たちの生命が、神との、また隣人との関係という新しい組織のうちに置かれていることを知り、その中において、イエス・キリスト自身のあらゆる力が人間に譲り渡される事を知り、またその中において人間が絶えず時間と空間との究極に向って押しすゝめられている贖の愛の働きのうちに、キリストの働きへとひき入れられるのであるということを知るのであります。

世界教会協議会の総主事であるW・A・ヴィサー・トーフト先生は、聖ヨハネも、聖パウロも共に、この世界を救済の計画の一部分として語っていることを指摘しております。コロサイ人への手紙に「キリストは、すべての造られたものに先立って生れた方であり、万物は彼にあって成り立っており、また彼によって、地にあるもの、天にあるものすべてのものが、神と和解させられるのである」と述べられております。彼は続けてこう言っております。「ディトリッヒ・ボンフェッファー先生は二つの領域という考え方、すなわち一つの神的な聖なる自然を超えたキリスト教的領域と、もう一つの世俗的な、自然的な、非キリスト教的領域とからなる考え方を攻撃しました。彼はイエス・キリストの宇宙的意義の上に、彼の神学と倫理学の全部を打ち建てるのであります。ですから救済に関する神の計画の目的として教会は自らのエゴイズムから抜け出されなければなりません。教会は神にこの世から呼び出されて、福音を持って又この世にいるように命じられております。さもなければ教会はキリストの教会ではなくなります。教会は神のために存在するのでありますが、神はイエス・キリストによる世の和解に対する教会の忠実な証によって讃美されたのであります。カール・バルト先生も「神は単に教会の領域の内部のみならず、宗教的領域の外側においても主である。ゆえに政治的行動に加わることは、キリスト者にとって、奉仕の一形態として考えられねばならない」と言っております。

ヴィサー・トーフト先生は「三つの基督教的使命」と題する講演の中で奉仕の主題を示しました。彼は次の点を強調したのであります。

一、教会はイエス・キリストとともにあるべきこと。
二、教会は巡礼の民としてあらゆる世界の中へゆくべきこと。
三、教会はイエス・キリストが弟子たちの足を洗われた（ヨハネ伝一三章、一四—一七）如くイエス・キリストの精神において奉仕をなすべきこと

教会はこの三つを求められていると述べています。先のヨハネ伝一三章一四—一七にあるこの個所は、イエスが私たち人間同志に対する相互的な奉仕以上の大きなことを成されたということを述べているのです。それは私たちの同胞に奉仕することにこそ、私たちの生活の意味があるということを語っているのであります。もし万物の主が僕として働き、奴隷の仕事をされるのであれば、弟子たちは僕の僕であります。私たちはキリストの使命を受け入れ、同胞との関わりの中でこの使命を認識し、繰り返す事を学ばねばなりません。

「奉仕せんとする神の民の使命は我等自身が、完全に人間に役立つようになる事である。」我等の奉仕は私達、即ちわたし達しかりないものでなければなりません。物質的、精神的に欠けているもの

ストラスブール会議の神学的背景



李　仁　夏

一　問題の背景

ストラスブール世界会議の有力な指導者の一人、レスリー・ニュービギンは、その著「神の民」(The Household of God, 1953)のはじめに、最近の神学論争において、教会論が中心の場所を占めるようになり、教会の最大関心事となりつつあるということを述べて、それには左に関連している三つの要因が考えられると云っている。その三つは、(1)、いわゆるキリスト教国の崩潰と、(2)、古い西欧のキリスト教国圏外における宣教の経験と、(3)、現代のエキュメニカル運動である。

西欧キリスト教国の崩潰の意味するものは、福音と西欧文明の統一が解消したことである。西欧の歴史が示す如く、千数百年の間、福音が西欧の世界に浸透し、その個人生活、社会生活に強烈な影響を持ち、全人口が好むと好まざるとにかかわらずキリスト教との関りに生きねばならず、必然的に、キリスト教的文化圏のようなものが出現した。そこでは宣教ということが強烈な問題とならなかった。教会はキリスト教という領域において、教会のことを考え、異教の世界に対する教会ということが規定される必要がなかった。ところが、中世から近世にかけて、キリスト教の福音と西欧文化との結びつきが解消され、教会は非キリスト教的な世界と対決せざるを得ぬようになった。外国宣教の経験が西欧の教会にもたらすものと、キリスト教国内の反キリスト教的運動によって、教会はもう一度自らにその本質を問わねばならなかった。さらに、西欧世界の世俗化の真中で、教会は自らの使命を問わざるを得ないようになった。

外国伝道といわれる現代の宣教活動の初期を研究すると、この運

とかといった「霊の供物」を献げるために「尊い祭司職」となっているのであります。

田舎と都会の生活、学校と工場、国家と世界が緊密な社会的関係の連絡の網を形づくっております。こう言ったものが基督教的方法で行われる時に、それらは尊い祭司職をはたすことにおいて、「献げられたもの」となるのであります。

今日、信徒の使徒職についての主な問題は、使徒職責任観に目覚めることゝ、その任務を行う為に訓練することにあります。（現実に教会は使徒職使命に目覚めていない数多くの人々を目覚めさせる事から、始めなければなりません）。同様にしっかりした訓練が必要とされます。すなわち、

一、厳しい神学的訓練。
二、信徒の現実的要求に適なう精神的訓練。
三、近代的世界の状態に応じた注意深い訓練。

であります。

教会にとって世界を真剣に取り上げることの必要性は、オランダのユートリヒ大学の神学教授であるハンス・ホッケンダイク先生によって力説されました。その中で彼は次のように述べました。「然し概して教会は全く不承不承に、近代世界と関っているに過ぎない。教会はキリストがこの世界と密接に結びつけていたことを信じていなかった。従って教会は、人々を、近代世界から救い出そうと試みた」。この近代世界とに提携しようとしないという最も強いしるしは、恐らく教会生活の前近代的構造（中世的教区形式）がなお永続していることに見られ、その結果として近代の特殊な仕事に携っている大部分の人々が教会の生命と、生きたつながりを少しも持っていないのであります。近代世界において、人間が完全に手を携えることを可能にするには

一、伝統的な教会組織を外に向った、生々した弾力性のあるグループに変えていくこと。
二、教会を真に世俗化すること。
三、福音の非宗教化をはかること。

が必要であるように思われます。キリスト者はこの世の人間である。彼は清浄な人間の状態へと、復帰する過程にあるところの人間であると、ホッケンダイク先生が言っておられます。

教会がこの世界におけるその使命について考える時、教会は自らの誤りを、その信仰の足りなさを、その不従順さを、そして自らの新生の絶間ない必要性を告白しなければなりません。キリスト者の新生と同様に、教会の新生もまた、神においてのみ可能なのであります。私たちが聖霊を受ける時に新生が可能となるのであります。教会の新生によってイエス・キリストにおける喜びに満ちた信仰へと、人々を導くことが出来るのであり、神は私たちの不完全な奉仕を用いることによって、社会を変革させることが出来るのであります。

（日基教団京都教区宣教師　学生YMCA協力
主事「教会の生命と使命」委員会協力主事）

このような状態を理由ずける根拠はいくつかあるが、まず、今世紀初頭の神学のもっていた弱点があげられる。これは単に、SCMの問題でなく、プロテスタント教会全般の問題である。スウェーデンの神学者アウレンは、この点に関して、教会と世界との関係にふれながら、二つの問題を指摘した。（アウレン著「教会・律法・社会」参照）すなわち、敬虔主義と近代主義とである。個人的な福音的経験に基礎づけられた敬虔主義は、何の役も果たさないでこの世界の腐敗から退くか、そうでなければ、回心者をすぐさまその任に耐えうるものと考えて、この世界をただちに改変しようとするか、どちらかをした。一方においては、思想の貧困があり、他方においては理想主義に走り、結局、社会で敗退するか、その関りを失うことになった。他方、近代主義は、福音を世俗化することによって福音を売りわたし、その力をそいだ。いずれの場合にも、教会はこの世の中心問題と危急の状況とに、力をもって関ることができなかった。こうした神学的動向から、前向きの教会論を期待することはできない。

しかし、現代における新しい神学的動向は、その出発点に宗教改革の神学の最も深い志向に帰ることで福音の正しい理解をもち、さらにそれは聖書神学の復興をもたらし、その結果、急速に変革しつゝある世界の中での、教会の姿勢を再検討せしめるようになった。特に、教会の問題が前面に出るようになったのは最初に述べた諸理由が重なりあってのことであった。SCMがこういう神学的動向を自覚的にとらえるようになった一つのあらわれは、一九五五年の暮、米国のアセンズで開かれた学生伝道運動（SVM）の総会でみられた。筆者も留学中に参加したのであるが、「革命と和解」という主題で、約三千名の学生が急速に変革しつゝある歴史的状況の中で福音がどのような意味を持っているかを問うた。和解の福音の理解は教会の宣教の使命の再発見へと導かれ、宣教とはわれわれが今日生きているこの世の重要な出来事のたゞ中に入っていくことであるということが明らかにされた。

WSCFは以上のような反省を経て「教会の生命と使命」を研究主題としてとりあげるようになった。この研究企画は各国のSCMがそれぞれ当面している諸問題との関りにおいてなされることは勿論であるが、一方においては、教育的意図をもった一連の国際的会議によって推進される。その主要な会議がストラスブールで開かれた。こうした教育的な会議は、問題があきらかに神学的なものであるからであり、教会の使命の本質とか、宣教の聖書的根拠を問い、それぞれの情況で効果的な奉仕が出来るように準備するためである。このストラスブールの出来事の前におこったラングーン会議の成果をまず、注目する必要がある。

二　ラングーン会議

一九五八年の暮から五九年の初頭にかけてビルマのラングーンで、「神の世界における神の民」という主題を掲げて、WSCFのプログラムの最初の地域会議が開かれた。（「学生キリスト者」第一号四〇頁、中川秀恭氏報告参照）この会議はストラスブールに到る道標の役割を持っていた。アジアがこの目的のために選ばれたのはこの大陸における宣教の諸問題が緊急のものであるという視点からであり、それは世界中の教会の困難を反映しているからである。この会議を通していくつかの神学的統一見解が明らかにされた。この

動がいかに古いキリスト教国の理念に影響されてきたかがわかる。ミッションはキリスト教国のフロンティアの拡張とみなされ、宣教師は福音と共に西欧文明の担い手として被宣教地にやって来た。しかし、アジアやアフリカの教会の力が伸びるに従って、これまでの前提を再考する必要に迫られた。歴史的には、西欧の植民地主義の後退に伴い、新しい国家が生れ、国民的自覚が高まったことにもよる。今や、福音と西欧文明を区別して考えねばならず、教会は、いかなる環境の中にあっても、福音によってそこに立たされているという基本的な理解を獲得した。しかも教会はその立っている異教的地盤のもつ宗教・文化・社会の諸問題と新しい関り方を求めるようになった。そこで信徒は必然的に、本質的な面においても、実際的な面においても、教会の成員となることの新しい意味を問うようになった。若い諸教会の教会論への関心は神学者によって提出されたというより、むしろ信徒が日々の生活において接するこの世との問題からきたことに特色がある。

過ぐる一世紀に亘る教会の宣教運動の結果として生れたものに、エキュメニカル運動がある。これは世界の教会を一つにして、再び、キリスト教的世界文化を形成する運動ではない。その出発点に宣教的意図があることを忘れてはならない。自らとっているオイクメネというギリシャ語は、新約聖書において、世界大の教会を意味せず、教会がつかわされている人間の住む世界のあらゆる領域を意味する。そこにおいて、教会は世界を救うために来り給うた救主に服従しつゝ、宣教の業を果していくのである。この出発点に立って、教会は、現実に諸教派やイデオロギーのために地理的分離を持つ諸教会の分裂的様相を問題にせざるを得ない。現在におけるエキュメニカル運動の決定的あらわれは、世界教会協議会（WCC）の形成である。一九四八年のアムステルダムの第一回会議では、ともかくも一緒にとどまる《We intend to stay together.》ことにおいて、教会の唯一の首であるキリストから学び、一致を目指すことになった。しかし、諸教会がもつ相違をのりこえて一つになるということのために、教会論はいよいよ比重を増して来る。それが単に相違する教会観の比較という消極的な面においてでなく、さきにのべたように変革しつゝある世界に直面している教会の宣教の課題として、教会論は積極的な展開を要求されている。

以上述べたような事情を背景にして、世界の五十余ヶ国の学生キリスト教運動によって構成されている世界学生キリスト教連盟（WSCF）は一九五七年から一九六四年に亘る七ヶ年間、「教会の生命と使命」という研究企画をすゝめることになった。WSCFの目的は一八九五年の発足以来、次のような言葉に表現されている。「学生と教師の間の全ての働きにおいて、教会の生命と使命の中で、彼らにキリストの弟子となることを求め、教会の礼拝と証しに責任を以て参加するように彼らを助け、そして神の国の使命として全世界に出てゆき、教会の一致をあらわすために働くことができるようにすることである」（学生キリスト者第一号二五頁）その出発の動機はむしろ宣教への熱意からであった。ところが近来、この点に関して何か欠けていることが学生キリスト教運動（SCM）にみられる。学生は自分の大学や世界に対してSCMが担っている責任について明確な意識に欠けていることである。その結果SCMはそのつかわされている場所で自己を防禦するだけで精一ぱいという受勢に立たされた。これは日本だけにみられる現象でない。

「世俗的な聖の生活」へと呼び出されている。」という表現がラングーンでの統一見解として表明された。

三　ストラスブールでの展開

ラングーンでの先駆的な会議の成果と、各国のSCMがそれぞれの場で当面している問題をうけて、ストラスブールで展開されたものを瞥見しよう。そこでおこったいろいろと興味ある外面的なことはほかの参加者の報告にゆずって、そこで展開された内容を私なりに整理することにする。ストラスブールの主題は「この世に対するキリストの聖務と今日におけるわれらの召命」であった。主題に従って内容を三つに分類することができる。(1)、世界、あるいは歴史において神のなし給う業について。(2)、基督教的展望から今日の世界を如何に理解するか。(3)、教会はこの世界に如何に関っていくか。

教会がその使命に生きることはその生命にふれることをほかにしてあり得ない。説教を含めた三二の講演の最初の部分はこの歴史において神のはたし給う業について献げられた。ヴィサー・トーフト氏は「神の子・神の民・神の世界」という講演で次のように力説した。「歴史における特定の瞬間、特定の場所に生きた一人の人が神の子であったという聖書の基本的主張、これ程、自明でないものはない。しかも、この出来事が人間や歴史を決定する。神はこの御子を通して人間と和らごうとする。これがわれわれの宣教の中心命題なのである。」ニュービギン氏はこのことを、神が御子を与え給う程この世を愛されたというヨハネの言で展開した。イエスを和解者として認めた者は必然的に、特定な一つの身体なる教会にと召され、神の民としてキリストにおける神の国の出来事を証しするのである。

ストラスブールで特に強調されたことに、神の業としての聖霊の働きがある。聖霊は旧いイスラエルが新しいイスラエルに再誕生する出来事、即ち、教会において働いており、しかも教会がこの世でその使命を果すことにおいて働き給う。そして教会がその分裂を恥とおもって、一致へと志向するあらゆる努力に聖霊が現在し給うことが強調された。この聖霊において生けるキリストと出会い、キリストへの信仰と服従をうながされるのである。

基督教的展望から今日の世界を如何に理解するか。教会がこの世においてその使命を果すために、この世の情況を明確にとらえる必要がある。今日の世界の特色は革命の時代であるということである。旧い社会構造が崩潰して新しいものを模索している社会革命、政治革命に加えて、科学的にも地球を中心にした聖書の宇宙観では直ちにとらえられない革命に直面している。過去の歴史をみると、教会はこうした革命に否定的な、あるいは消極的な関り方をした。M・M・トマスという印度の指導者はこうした教会の現状にチャレンヂして、この問題を次のように展開した。

革命は必ずしも神に対する反抗でない。神の創造的摂理のもとにおいて、今日の革命はそのうちに人間や社会に対するより充実した豊かな生を目指してのキリストの約束を持っている。それ故に神の民としての教会は革命において働き給う神の創造的業に参与することをゆるされている。

会議からの諸種の報告によって、それを次の三つの成果として示すことができる。(1)、キリストは教会の主であると共に、歴史と世界の主であり給う。(2)、教会はこの時代に生きる神の民である。(3)、信徒の在り方に関する新しい理解。この中のある問題はすでにエキュメニカル運動の展開にあたって、たえず神学的話題に上ったことであるが、アジアの状況で、またSCMのレベルで具体化してきたことに意味がある。

ラングーン会議の主題が「神の世界における神の民」と掲げられているが、神の世界と表現される言葉の中に、この世に対するキリストの主権についての現代の神学が到達した深い洞察が要約されている。新約神学者・クルマンはあの有名な「キリストと時」という著書において、この世界がキリストを中心とする救済史の中に入れられることを聖書的根拠を示しつゝあきらかにして、教会と世界の関係をキリストを中心にする二つの同心円という表象をもってした。この同心円的理解はいろいろな面で問題を持つとはいえ、この世に対するキリストの主権が明らかにされたことに意味がある。このことに関しては、ヴィサー・トーフト著の「キリストの王権」(日本語訳「現代ヨーロッパ神学」)がその意義を指摘する通りである。この理解から教会は聖と俗との誤った境界線を引いて、この世を全然退けるマニ教的二元論におちいらず、このキリストの主権を知らずにいるこの世に向って積極的な姿勢をとることができる。しかもキリストの主権はその栄光のかたちと同時に、僕としてのかたちとしてとらえられる故に、この世においては仕える生き方としての教会の使命があきらかにせられる。ラングーン会議では「キリストが歴史の主であるならば、現におこりつゝある諸革命の主でもある」という発言もあり、歴史的変革のたゞ中で、キリストに服従する意味が問われた。

ラングーン会議で「神の民」という言葉がひんぱんに用いられた。これはペテロ第一の手紙二章の聖書研究から得られたものである。これは今日、教会が神の召命に応えるために、どういう形をとらなければならないかを見いだそうとして、教会の更新ということと関連している。教会を制度的に限定せず、旧新約を貫いて、今日まであゆんできた神の民としてみることである。イスラエルが神の民として選ばれたのは、その特権を行使するためでなく、世界に神のことばを伝える使命を負っていることは、神との契約の締結に明瞭に示されている。キリストによって新しきイスラエルとなった神の民・教会はやはり世界に向って同じ使命を負っている。こうした聖書研究から教会の使命を明らかにしていくところにWSCFの研究企画の意図がある。ラングーン会議はその意味で教会とその使命を神の民としての視点からフレッシュにとらえている。

ストラスブール会議の指導者の一人、H・R・ウェーバー氏は信徒論を新しい意味において一本に紹介して、多くに知られているが、ラングーン会議でもこの面で劃期的貢献をなした。教会が神の民としてこの世でその使命を果す場合に、信徒の役割が全く新しい視点からながめられねばならない。信徒は、単に敬虔な孤立者としてこの世から隔絶して生くるのでなく、この世のあらゆる分野にキリストの主権がかくされていることを知る故に、生活の全ての分野でキリストに服従し、決断して生きねばならない。教会の生命にあずかっている信徒はその使命を負って世俗のたゞ中にキリストの苦難にあずかって生きるのである。「信徒はこの世のただ中における

教会の方向転換―現代の教会論

―ストラスブルグの会議の意義―

関本　肇

WSCFのストラスブルグ会議に参加したものゝ一人として、その報告を求められた。課題は、「教会論」より見たストラスブルグ会議の意義を論ぜよ、と言うのである。「教会論」と言う術語が、読者にとって何の様な意味内容を持っているか。それは筆者には明らかではないが、少くとも私自身にとって、「教会論」とは、何か既成のあるものについて、学び、或は論ずると言う、そんな意識が、今更乍らあったことに気付くのである。と言う事は、「教会」についても又、それを、既成の、固定した形式として受取っている危険がある、と言うことである。正直に言って、この与えられた課題を前にして、私は、瞬時、ためらわなければならなかったのである。

そこで、筆者として出来る限り忠実に、この会議のドキュメントを読みかえす事にした。自分で作ったノートも開いてみたし、或は又、絵はがきと、写した写真集ものぞいてみたのである。一体、一九六〇年夏の、ストラスブルグ会議とは、何であったのか。やがて私の目の前に、あの、まるで人種の展覧会の様であった会議が、美しいフランスの古都を背景にして、鮮かに甦えって来るのである。

いかにもこれは、世界会議であった。白色人種のそれでなく、黒色と、黄色の人間とが、共に等しく会議に参加することによって、教会が、世界の仲間である事を証ししたのである。黄色い人種を代表して、そこには、吾々日本人と同じく、韓国人も出席していた。複雑な国民関係の中にある吾々である。キリスト者として異国で相逢うことの出来た代表者達は、当然、それらしい和解を持つ筈であった。やがて、意志相通じて、会期中のある日、町中の支那料理屋で、日韓会談を開く事になった。向う側に韓国代表者が席をとれば、こちら日本人、と言う工合である。何れの側も、この機会に於

しかし、革命は同時に、個人的・集団的エゴイズムの悪を内包しており、自己義認とキリストの約束をやぶろうとする自己絶対化と偶像化の危機的要素を持っている。それ故に、教会はそこにおいて予言者的批評をしなくてはならない。

以上のことを考慮するときに、人間に対するより充実した生を目指してのキリストの約束は革命がキリストの贖いの業とキリストにおける新しい創造と関るときにのみ成就される。これが実は教会のこの世に対する証しである。それ故に、教会はこの世に対して、そこにおいておこりつゝある革命に和解の任務を担っているのである。

以上に述べたことは単に、図式的に表明されるものでなく、現実においては東ドイツの指導者がいったように、教会が民族のなやみを共になやむという姿においても表明される。

教会はこの世に如何に関るかという問は、この世の諸問題の持つ意味を問うことと同時に、教会の在り方、その更新を問題にせざるを得ぬ。ストラスブールではこの点に関して現在の教会に対する激しいまでの批評やその更新への熱烈な追求がなされた。

まず、教会がこの世にあることの再確認がなされた。教会の存在理由とその使命はこの世にあり、教会の生命とはこの世のための生命ということが強調された。その神学的根拠は、オランダのホッケンダイク氏の発言に強く表現されている。すなわち、神の贖いの計画においてキリストとこの世は分離することの出来ない程結ばれている。受肉においてキリストが来り給うことは一つの世俗（セキュラー）的な出来事であり、この世における、この世のためにおこった出来事である。教会はこの世から教会へという一方的交通だけでなく、世俗の真中に来り給うたキリストに対応する姿勢をとらなくてはならない。そのために教会はその伝統的構造から動いて出て、自らを非神聖化し、非宗教化していかなくてはならない。

こうした教会の制度主義への批評は教会がこの世ともっと効果的な関りを樹立し、この世との生きた対話に入るためである。このような関りをほかにして教会の宣教を考えることはゆるされないという学生の自覚のあらわれである。この世という時にはますます教会との関りを失いつゝある現実の世俗のことをいう。敵意をもっているイデオロギー、諸宗教、民族主義の世界、民族差別の様相、階級闘争、冷戦、経済的困窮、世界のみならず人間の精神を変革させる思想や科学の革命、これらの諸要因は教会の証しを困難にさせているだけでなく、時には明らかに不適切なものにしている。

こうした世界に向って教会がきりこんでいく時に、もう一度信徒の役割が注目された。ベルギーの神父ハメル氏は講演者の一人として信徒論にふれて、信徒が世俗のただ中におかれていることは神の深い摂理であるといった。この世のうちでキリストがなやめる僕としていまし給わないところはない。それ故、信徒はこの世において、苦難へのファッションをもって仕えていくものでなければならない。こうしたこの世に徹した生き方によって、はじめて信仰が得られるといったボンヘッファーの証しが多くの指導者によって語られ、また、聞く者に新たな決意を持たしめた。

（「教会の生命と使命」委員会協力主事）

らす種類の宗教がある、と。要するに、吾々の住む世界の中には、この種のクリスチャンがいるか、さもなければ、ボンヘッファーが言った様に、吾々は、宗教の全然ない時代にいるのかもしれないのである。イギリス北部の鉱夫のおかみさんが言ったと聞く。

「へえー。クリスチャン。私はその種の人間ではないんですよ。」要するに、現代世界とは、クリサンドムの反語だと、オランダのヘーケンダイク氏も語るのである。キリスト教世界とか、又宗教国家の概念は既にない。西欧支配の時が既に破れた如く、吾々は今や、「破れた世界」に生きているのである。これはアメリカ人ショール氏の会議に於ける発題講演の主張でもあった。一体、現代世界に於て、教会とは何であろうか。フォルクス、キルヘ（国家教会）は、長い間、いかがわしい、うつろな、俗物根性の無神論者たちの巣であった、と、東ドイツのアドラー女史は語る。だから、教会は、今、こゝで、即ち、コミュニズムの前で、即ち、現代世界の前で、悔改めなければならぬ、と、彼女は激しく説くのである。

教会は、悔改めなければならない。教会は、その方向を転じて、生き出さなければならない。クリサンドムと言う、教会と世界との中世紀的な一致は、政治的にも、社会的にも、又知的にも破れ去って既に長い期間を経ているのである。フィンランドのジュバ教授が語る様に、信徒が、教職支配の教会から置き去られた如く、クリスチャンは、この世界との関係を離れ、神の王国は、この世の王国との対立概念でしかなかった。二元論は、数百年の間、解かれざる問題として残されているのである。その様な二元論の中で、教会が、宗教的である、と言うのであれば、教会は、現代世界の無宗教の時代に生きるために、敢て、「非宗教化」しなければならない。

即ち、教会は、世俗を離れた奥深い聖所である事から、教職支配の制度から、断固としてその方向を転換しなければならない。再び、プラーグのロマドカの言葉によれば、キリストが、人類の悲しみと、罪の汚れの底へと降りて来られたのであるから、キリストに逢うことは、どうしても、人間の底の底に於てでなければならず、それが又、教会が、現代世界と逢う所でもなければならないのであろ。ヘーケンダイクの用語を借りるなら、インカーネーションとは、即ち、キリストがこの世界へと来給うたセキュラー・イヴェントであり、それ故、キリスト教は、その本来の姿として、セキュラー・ムーヴメントでなければならぬと言う事である。教会は、方向転換しなければならない。教会がその方向を転じた時、教会ははじめて、キリストが、この世界に来給うた事を理解するであろう。その方向を転じた教会は、この世界の中にあって、その存在自体に使命がある事を見出すのである。主を知らぬ、と言われたラテン・アメリカに於て、或は又、「破れた世界」にあって、教会は今こそ、その存在の意義を知りはじめるのである。そこでは、教会と世界とが、切り離し得ぬ関係をもち出すのである。即ち、教会は、世界の挑戦を受けて、これに答え出すのである。しかし一体、教会は何と答えるのであろうか。

二　神の国

—キリストの宇宙的主権—

「汝現代世界よ、私は汝がそのかたちをなす前から、汝を知っているのだ。」と、主は言われる。エレミヤが召された如く、サウロが呼ばれた如く、又ガリラヤの漁師達と、サマリアの女に於ける如

て、何とかして胸襟を開きあい、キリスト者としての和解の実を確かめたいのである。遂に、一人が口を開いた。

「この機会に、吾々の手で、両国の親善のために橋を建てるべきである。」

待ってましたとばかり、他の一人がこれにつづく。

「我々の手で、代表者を交換しようではないか。」

「この秋に、早速……」

しかし、会談は発展しそうで実はなかなかうまく行かないのである。日本の数十年にわたる韓国統治について、両者が夫々に持つ暗い記憶のためであるのか、それとも、李承晩ラインをめぐる不愉快な出来事のせいか、ある種のわだかまりが、両者の間の溝となって和解をさまたげるのである。その和解への「方向」が違うのではないか。遂に一人が発言したのである。

「悔い改めなければならない。」

どうしても、その「方向」を変えなければならない。吾々が和解の橋を建てる、と言う風な事ではなくて、二つの国が夫々に持っている負い目を、夫々が正直に負う事によって、即ち、悔い改めることによって、その方向が転じられなければならないのである。この会談は、この「方向転換」を契機にして、真実に心の通じあうものになったのである。

「教会論」よりみたストラスブルグ会議の意義が何であるのか。私はそれを、「教会の方向転換」と名付けたいのである。もし、「教会論」と言う術語について、何等かの既成概念があったとすれば、私もそれを捨てる。ここには、現代の教会論がなければならない。そして現代の教会論は、何よりも先づ、キリスト教会の猛省から始められなければならない。

一　教会と世界
―キリスト教会の猛省―

「しばらく、吾々が今生きている状況に目を向けてみようではないか。」

チェコのロマドカ教授は言うのである。吾々の信仰はもう通用しないのだ。吾々は崩壊の時に住んでいるのだ。古い生き方はもうなくなった。伝統も止んだ。世界と人間性の全てが変化している。不安、緊張、不信、偏見、苦痛、そしてある種のヒステリアが、吾々の生の深みにうごめいている。前大戦の悲劇の結果、世界を覆った革命が、吾々の心情の底流を、然り、人間実在の深みを揺り動かしたのである。重大な問題がこゝにはある。果して吾々は、今でも聖所から語られる言葉を理解しているのだろうか。聖徒の交わりについて、正当な実感があるのか。イエス・キリストが救い主だという意味を本当に知っているのか。ナザレのイエスとは一体誰か。そして救いとは。他所事ではないのである。これはキリストの証人を以て任ずる吾々自身の問題なのである。果して何うであろうか。イエスは、現代世界に住むクリスチャンにとって生活の飾りでしかないのではないか。曰く、リタジー、曰く、教会暦、そして又「信心深い話し」。

アルゼンチンのボニノ氏も又、ラテン・アメリカは、主イエスを知らないと告白する。村々の守護聖徒の祭りはあるが、福音が人々の心の中で生きてはいないと言うのである。イギリスのブリス女史も皮肉をこめて言った。現代世界に於ては、首のまわりに十字架を

「何故ちがうのか。」
誰もたづねない、誰も教えてくれない」

さて、教会とは何か、吾々は教会の概念、又その理想について語りすぎる、と、ヴィサー・トーフトは言うのである。即ち、教会とは観念ではない。教会とは、神の人々、即ち現代世界の人々である。キリストの、即ち、宇宙に於て主たる彼の、その身体である。勿論、これは素晴らしい神秘である。そこには、唯一にして、聖なる公会のヴィジョンが見えている。だがしかし、教会が世界であると言う本質の故に、教会は、具体的な人間の交わりとして、地域的な信仰者の集りとして使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをする一仲間として表現されなければならない。それ故、素晴らしい教会のヴィジョンに生きる事は、吾々が今召されている、現実の、この小さな地方教会、その人間の交りの中に於て生きる事にほかならない。エキュメニカルと言う無知を振りかざして、現実のローカル・チャーチから離れた浮草の如きクリスチャンであってはならない。むしろエキュメニズムについての問題は、多くの人々が、教会について誤った概念を持っている事にあるのである。世界の教会は、キリストを中心にして教派的に、或は地域的に散っているのである。互に近寄る道は、たゞ、神の国、この宇宙・世界の主たるキリストへと近寄る事なのである。

教会は、キリストの宇宙的主権が、この現実世界に於て行使される手段である、キリストの主権が、既に教会に於て現成されており、聖徒達がそれを証ししている。がしかし、だからと言って、全てのクリスチャンは、自分達の集りが、それだけが神の国だと考えてはならない。アメリカのミエンドルフ氏は、「神の国」についての誤った危険思想を指摘している。即ち、神の国を、クリスチャン国家と言う風な、社会学的実体の概念と置き換えてはならず、或は逆に、神の国を、精神的解釈の中に解消してしまってはならぬと言うのである。「神の国」は、たゞひとり、神の手によって基を置かれ、たゞ神にのみ属するのである。教会はその役割について混同してはならない。教会は、「神の国」の完き成就を祈るのであり、その使命は、この「神の国」を宣言し、それを行為に於て証しする事なのである。ナイルズは、この点に於て、意図に於ける普遍性と、方法としての特殊性とを学ぶべきことをすすめる。それが、イエス・キリストとその教会なのである。そして、教会とは、ヴィサー・トーフトによれば、極めて簡単である。イエスに於て在る事、イエスと共に往くこと、そして、イエスの如く行なう事なのである。だが、吾々は如何にして現代世界に在り、往き且つ行う事が出来るのであろうか。

三　宣教の教会
―伝道の使命―

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し……」

これが教会を特徴づけるマークである。フランスのマロー教授によれば、初代教会に於けるこの働きは、極めて自発的な、自由な、広い、しかし組織をもたぬ運動であった。が、やがてそれ等は変貌した。インドのトマス牧師は、それ以後の教会を批判して、余りに教皇主義的、余りに教会主義的、余りに教職支配的と語る。それ等が物の用にたたぬ事は既に見たところである。それ故、吾々は現

くイエスが、全ての全てに於てイニシャティヴを持っているのである。人間の生に於ける、この「イエスの先在性」こそ、最も重大である、と、WSCF議長ナイルズ博士は言う。そして、これこそ、教会が世界に答える地盤なのである。キリスト教は、抽象されたタマシイについてではなく、世界と関わるのである、何故なら、ボンヘッファーを引いて、WCC総主事たるヴィサー・トーフト博士は答える。「世界は、たゞキリストに於て、キリストへと向って支えられているのである。……神の御心に於ては、あらゆるものが、意識すると否とに不拘、キリストに関わっているのである。」こゝにはたゞ、「神の世界」がある。「神の国」がある。イエス・キリストは、その宇宙的様相に於て、決定的に主である、だから教会は、まるで自分だけが、神の救いの計画目的であるかの如き、あの利己主義から脱却しなければならない。聖なる教会と、俗なる世界と言う二元論は、捨てられなければならない。キリスト教的、非キリスト教的と言う、教会の精神分裂症的思想が癒されなければならない。さもなければ、教会はもはや、イエス・キリストの教会である事を止めるであろう。キリストは、世界の、全人類の主である。全ての人々がキリストによって創られ、キリストにあって救われているのであるから、キリストは全ての人々の頭である。世界を外にしては、教会はあり得ないのである。教会と世界とが、単純に同義語だと言う事は出来ないが、世界が教会を組成する諸々の契機なのである。或は、教会とは本来、正しい状況に於ける世界であるか、それとも、現実の世界とは、神に気付かない教会であると言えるのである。

IMC総幹事、ニュービギン主教は、まさにこの点に於て

God so loved the world

と語る。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで永遠の命を得るためである。」(ヨハネ伝、三の一六)神が御子を世につかわされたのは、御子によって、現代世界が救われるためである。キリストの十字架は、単なるしるしではなく、創造者の意図である。神が、此の世界を愛していると言うその愛は、一人の例外者をも認めぬ愛である。神の愛が、絶対的だと言うことである。若しも、クリスチャンが、神によって愛されていると言うのであれば、クリスチャンでない人々も、まったく同じ様に、(そして恐らく、それ以上にさえ)愛されているのである。まるで、神の愛を知らぬかの如く生きている人も、それとも、無神論者を気取る人も、神の絶対的な愛の、外側にあるのではないのである。福音の範囲についての理解が、現代までの教会に於て、狭められ、貧弱になっている事を認めなければならぬかも知れぬ。そうではなくて、キリストは、世界の主である。世界の全てがキリストによって愛されている。だから、吾々は、人々の肩をたゝいて、その福音の真実を知らせるのである。その人々が、神の祝福へと振り向く時、彼等は、世界の主なるキリストによって、既に愛されていることに気付くのである。この人々は、神の人々である。そして、教会とは、神の人々のことである。D・T・ナイルズがくれた一つの話がある。

ある日。主教アザライアが大聖堂の近くを歩いていた。時に一人の男がいた。

「お前、クリスチャンか。」

「ノー」



ストラスブール—一九六〇

藤　森　元

一

一九五九年七月十五日から三十一日までフランスのストラスブールで「世界学生基督教連盟世界会議」(World Student Christian Federation, World Teaching Conference on the Life anp Mission of the Church) が開かれた。「世に対するキリストの聖業と今日におけるわれらの召命」(Christ's Ministry to the World and Our Calling Today) が会議の主題として掲げられたが、そのねらいは新しい世界の政治的、社会的、経済的、宗教的、思想的状況における「教会の生命と使命」の本質と現代的意味を探求することであった。すなわちWSCFがWCC (世界教会会議) の委託をうけて「教会の生命と使命」なるテーマの下に展開している現代における教会の革新 (Renewal of the Church in our time) 運動の、ある意味では頂点をなす会議であり、一九五八年来展開されてきた本運動の前半において、主として理論的解明に重点を置いてきたのが、ここストラスブールに結集され、今後はその深化と同時に、具体的実践へと転回する時期を劃するものであった。このストラスブールの意向と経験にもとづいて、本年より世界六地域において地域会議が開かれることになっている。

会場はフランスはアルサス地方のストラスブール、ストラスブール大学。主会場は同大学の工学部校舎。学生会館、工学部学生寮等が食堂、社交場、宿舎となり、更にかってシュバイツァー博士の学んだプロテスタント神学校舎が特に講師たちの宿舎となった。その他、サンジローム教会、サンパウロ教会等の礼拝会堂、等、市内にちらばる建物がいくつか使用された。ローマのフォルト、中世のカテドラル、かって若きーをこの地と大学におくったゲーテ、或いは宗教改革者たちの戦いの跡など、宗教的、歴史的、芸術的、或いは自然の豊かさ美しさがわたくし共にとって、かけがえのない教育的環境であった。

アルサスの夏の気候は不順であった。毎日時雨のような降雨があり、気温も涼しかった。美しいマロニエの並木、軒並み鉢植されて窓を飾るゼラニウムの紅赤の美しさ、ラインの谷にたわわにたれさ

代世界への宣教のため、新らしい教会のフォームを求めて苦闘するのである。

教会とは、神の人々であった。この人々のみが、世界に深く住んでおり、世界の言葉を解するのだ、と語って、ハメル神父は、今は「信徒の時」と言う。信徒の使徒職としての召命が確認されなければならぬ。その責任について、教えられ、霊的にも訓練されねばならない。彼は、使徒職とは、現代世界に於ける「対話」だと語る。しかし、如何なる「対話」が可能であろうか。イスラム諸国との対話をつゞけるイギリスのクラッグ博士は述べる。吾々は、低級な現象面で論じあってはならない。迷信と迷信とが言い争う事は漫画にすぎないのだと。神はイエス・キリストのインカーネーションに於て、論争を捨てて、理解の道を選んだのである。教会――人々も、この方向を選ばなければならない。人種問題と、文化的テンションの真只中にあって、教会がこの方向感覚を持つべき事を、アフリカのマクル氏も指摘している。印度のトマス氏は、大戦後の社会革命の中にある教会であれば、まずその革命を理解し、予言者的に批判し、その中に於て、和解の働きをなすべきであるとする。教会は、このインカーネーションの方向に於て、現代世界に新たになるであろう。教会の革新について、WSCF総主事たるフランスのモーリー氏は、まず、その人々が人間として自由であること、悔改めと言う方向転換をなすこと、そして、キリストの弟子として訓練されるべきことを語った。これ等の方向に沿って、宣教の教会は、その具体的なあり方を決めうるであろう。

教会はまず過去から自由でなければならない。その歴史的機構、制度、言語、礼拝、伝道、すべてにわたって革新がありうるであろう。ヘーケンダイク氏は、例えば、教会は、あの家、この家と言う風な場であるべき事を示唆している。伝道的な教会機構ではなくて、開かれた、可動性、且つ柔軟性に富んだものであれと言うのである。大寺院の構造ではなくて、人々がそこで、人間らしく振舞える場であれと言う意味である。モーリー氏が言うのであるが、しかし之等すべての革新があったからと言って、それで充分ではないのである。全ての背後に、キリストの主権が確信されていなければならない。嘗て教会は、近代世界の中に於ては、真実に、キリストを見出すとは信じていなかったのである。この世界の外側に、それを見出そうとして、自から失敗したのである。そうではなくて、あの家、この家に於て、いやそればかりでなく、あの街角と、又この工場の片隅に於て、主がおられる事が確信されねばならない。そこに家の教会があり、あそこに工場教会があり、こゝには学校教会があるのである。そして、そこに世界の教会がある。この世界は、聖なる世界と言われねばならない。聖なる世俗世界であり、聖なる労働世界、聖なる学校世界、聖なる家族である。聖性をぬきにした世俗、世俗のない聖性の神学を止めよう、と言うのが、我がタケナカ氏の意図であった。それ故、ウェーバー牧師も、教会についての希望だけでなく、吾々は、世界について、全ての創造物について希望を持つべきであるとする。

この様にして教会は、もう一度、この世界の中に自分の足で立つ事を学ぶのである。エルサレムの二階座敷の中に閉じこもっていた教会が、自分の足で歩き出し、聖ペテロと共に語り出し、聖パウロと共に、その宣教の使命を、真剣に行い始めるのである。出掛けて

(四九頁最下段につゞく)

最近世界各地で行われたいくつかの全教会的規模の会議で認識されてきたいくつかの重要な認識がある。第一に福音とは現実全体にかかわるものであり、その全体を媒介契機としてリアリスティックなものでありうるのであり、従って現代世界という語のもつ本質・内容に本来的に関わらねば福音は無内容となるということ。そういう意味で現代における宣教命令の新しい内容が再発見される必要があること。第二に、そういう意味では今日の諸教会、あるいは基督教諸団体はオールド・チャーチ、ヤンガー・チャーチであるの如何を問わず、皆一様に宣教の最前線に立たしめられ、そこにおける最も自分の責任をとるべき重要事に対決して、まことに主がイエスであることを証すべきであるという、いわばミッショナリースチュエーションにおかれているということ。第三に、それ故、従来の教会関係、国籍、人種、階級の差をすきとおして、皆が夫々の場でこの使命を完成すべく一つにされ、一つであることを証しすべく召されている。これが新しい世界伝道の意味である、等の認識である。

さて、ふりかえってみるに、WSCFとそれにつらなる各国SCMの基本的な考えは、現状に対する幾多の批判はあるにしても、その歴史をつらぬいて、以上のアイディアは原理的には確立していることで、あえて目新しいものというべきものではなかろう。しかし一方、そういう歴史的伝統が新しい事態に対応するだけの自由さを内にもっているのか、固定化現象が起っていて、もはや、このような問題のかかえ方を原理的には失ってしまっているのではなかろうかと、反省する必要もあろうし、又新しい事態の本質は何か、明確に理解して展開する必要もあろう。こういった点を組織的に検討してみるということが、そもそものLMC研究企画発端であった。私が一昨年夏ジュネバで列席したこの会議の指導者の準備会では、その時の印象によると、現在のSCMではかかる本来の問題のにない方が失われている、それ故、それを先輩である自分たちが後輩である今の学生に教えてやらねばならぬ」という空気が当初には、やはり相当強かったのではなかろうかと察せられた。このあたりが*eaching* conference ということの云われた最初のニュアンスであろう。勿論、この席上、こういう考えには強い反対が出されたのであって、やはり先輩も後輩も共に神の前にひざを屈し、頭をたれ、悔い改めて共に御言を聞き互いに教えあうというところから再出発すべきであることを確認して論をすゝめたのであった。

さてティーチングということについては改めてふれることにして、前述のような問題意識を基盤に一九五六年のトイッツングにおけるWSCFの総会は、次のようなステートメントを出して、LMC研究企画をはじめたのである。「……それ故われわれはWSCFのプログラムの大部分を学生をして全世界を通じ教会の使命に生きいきとあずからしめるよう努力すべきである。勿論これは聖霊の働きと信仰と希望と愛において新しくされた全人格的なコミットメントにおいてのみ可能である。しかし我々の従順のあらわれとして、来るべき数年を教会の使命とそれに対する我々のコミットメントについて新しい理解を獲得するための特別の機会として用いたい。我々はWSCFは、祈りと共に長期にわたる組織的教育と研究と会合というようなプログラムなしには、この責任を果せるとは思わないし、又教会の学生、青年指導者たちのあいだにこのことを果すには、諸教会、伝道団体その他あらゆるキリスト者団体の完全な支持なくしては行いえないのである」と。

がっているぶどうの房、郊外のサンオデールというカトリックの聖地でふるまわれた、こくのあるアルサスのワイン、町の片隅にあるプチ・フランスの十六世紀からあるという居酒屋での交わり、国境の村オーベルゼーバッハをたずねた時の全村あげての歓迎とルターの"神はわが力"の力強い合唱の一時など会議に色そえる忘れがたい印象として残っている。

二

会議の指導陣は議長としてのD・T・ナイルス博士（セイロン）以下WSCFの役員、及びP・モリー総主事（フランス）、LMCC担当のC・ロング主事（米国）を中心とするWSCF主事陣らを中心に、WCC総主事のヴィサー・トーフト博士（オランダ）、IMC（国際宣教会議）総主事L・ニュービギン監督（英国）、WCCのS・ニール副総主事（英国）、チェッコのプラーグ、フス神学校ロマドカ教授、特別参加のバーゼルのK・バルト教授等、今日の世界の全世界的教会機関の指導者、教派諸教会の指導者、ミッションボードの指導者、YMCA、YWCAのような基督教青年運動より、又有力な思想的指導者、神学者、各国のSCMの指導者、等指導者の全員は一〇四名に及んだ。

会議の出席者は八十ヶ国五九五名におよび、それは教会史上今だかってなかった数であった。この数と同等に大切なことは学生、或いは指導者としての参加を問わず、従来のエキュメニカル運動参加諸団体の枠をこえて、特にローマカトリック教会、又は保守的福音的立場にたつ諸教会からの、又当初はもっと多数を期待していたのであるが、それでも十二名のコミュニスト国からの参加があった。ヴァチカン側は毎日行われる講義の主旨を送るよう要請してきており、同教会の世界的学生組織であるパックス・ロマーナを通じて十一名の代表と二名の講演者を送ってくれたのであった。参加者を教派別にみるとローマ　カトリック　三%、ギリシャ　オーソドックス　七%、合同教会　八%、ルーテル教会　十一%、アングリカン　十三%、メソジスト　十五%、リフォームド　二七%、その他　十六%となり、その他の中にはバプテスト、組合教会、モラヴィアン、救世軍、ホーリネス、ペンテコステ等の諸教派が含まれている。

日本からは土岐林三（名古屋、日基教団御器所教会牧師）、鈴木伶子（津田塾大学学生YWCA）、宮部直（早稲田大学学生、東京SCF）、滝浦満（一橋大学学生YMCA）、李仁夏（LMCC主事、在日大韓教会）、本行孝司（YM学生部主事）、沖縄より野原輝子（琉球大学学生、沖縄SCM）が、更に欧米滞留者のうちより関本肇（聖公会京都聖光教会牧師、YM学生部協力主事）、ヘッセリング宣教師（バーゼル大学在日基督教団九州教団）、会議指導者として中川秀恭（北海道大学教授、YM学生部委員聖公会）、竹中正夫（同志社大学助教授、YM学生部委員）、N・サーバー宣教師（日基教団、京都教区、YM学生部協力主事、LMCC主事）、WSCFスタッフとして塩月賢太郎の諸氏と筆者が参加した。

三

さて会議の内容に入る前に準備段階でのことに一寸ふれておきたい。それはこの会議が"teaching conference"となづけられた所以をめぐってのそれである。

能力を既に失ったのか。我々は教会なしに基督者たりうるか。エキュメカル用語集。(B)、教会の使命＝人々を基督教に回心さすのが教会の使命の中心点であるのか。この世の国家は基督教的たりうるか。我々は自分の業を他の人々に敢て説教しようとするのか。伝統は教会の革新にハンディキャップであるか。基督者はこの世を生きぬく最善の方法を知っているのか。(C)、ミッショナリティとしての召命＝何故人々は伝道団体に興味を失ったのか。宣教師とは普通の基督者と異った特殊な人々なのか。使命としての仕事―世俗の仕事と基督者の召命、本質的な一致とは。それは一しょに働くというだけで充分なのか。使命に生きる民。

さて再び teaching conference の問題にもどろう。

日本においても各地で研究会がもたれ、又全国的なスケールでも数度の会議がひらかれ、選ばれた代表たちはこれら資料を検討して会議にそなえたのであった。それらを通してこのLMC研究企画、運動、又ストラスブール会議にも多く賛同と疑惑のあったことはいなめない。LMC企画が、今まで我々自身の手で、直面している問題の本質を限定することに困難を感じていたのを、外から明確に限定してくれたことに対する、いわば感謝と期待、又それに反して、LMCの発想法に対する疑惑、前提にあると目される神学、思想に対する疑惑、あるいは国外で限定されたものを国内に導入する時の態度についての批判等なかなかきびしいものがあった。筆者自身についていえば、この企画が外国、特に欧米において本当に足が地についたそれであるのかどうか、運動を云々するまえに、その担い手である教会とその成員が、特にSCMそのものが夫々の場所で、本当に自分の生活というものをもっているのか。本当に生きるという生き方が問題になるような生活、ストリクトな生活が営まれて、このような問いがでているのかどうかという点について、日本ではやゝもするとくずれている基本的なこゝへの反省とあいまって、この会議への参加に疑惑と不安と期待をもって備えたのであった。本当の対話がしたい。本当に自分たちの生活内容を知ってもらいたい、本当に相手のこゝを理解したい、これが私共の願いであった。こういった願いにとって teaching conference という方法は、ある意味で意義があったと思う。

第一に teaching conference とはお互い同志から学び合い、意見を交換し合い、励ましあうというだけでなく、お互いに訓練しあい、祈りに支えられてきびしく学び問い、他人の指導に謙虚に従うということである。第二にこの場合、"他"とは、その中に当然教会における信仰の先輩たちを含むのであるが、彼らは有名だから呼ばれたのでは決してなく、我々が戦っている同じ問題に生涯を通してたゝかい、それを通して、我々も学ばねばならぬ神の教えたもうたものを事実持ちあわせているからである。第三に、この本当の出会いのためには日頃の自主的な研鑽を本質的に必要としているのであって、会議はその意味では、会期以前から既に始まり、又今だに終っていないこと。第四にこの会議中、この teaching という方法は、単に講義をきくというだけでなく、他の方法をも中心に含むということである。それらは第一に、神の言葉と聖霊によって教えられるべき礼拝と三人の教者による教会である。第二に自習、第三に研究討議と祈りのための、チュートリアル・グループ、こゝにも会議のキイがおかれていた。最後にゼミナール・グループで、これは単なる関心、興味を中心とした個人の利益のためのみのそれでな

さて、企画の出発にあたり、教会と世界の状勢について夫々次のような分析をしている。これらが以後のプログラムをうみだす基本的現状理解になっている。先ず、教会内の状況として、㈠、教会の使命についての新しい神学的共通理解の生じてきたこと。㈡、教会の全体性についての、より適当な表現の必要性が感ぜられていること。㈢、聖書神学の復興。㈣、教会史と教派的遺産の重要性の再発見。㈤、従来の伝道地の教会が充分に独自の責任をとりうるよう生長したこと。㈥、上の教会を通してあらゆるキリストの業の全体性において、信徒の使命を果すべき本来の場所又は機能についての新しい理解が生まれていること、等である。世界の問題としては、特に、㈠、新独立国家の出現と植民地主義の終幕。㈡、古い宗教のルネッサンス。㈢、原子力の発達を含めて諸科学の不均衡な発達。㈣、農業社会から工業社会への変化とそれにともなう社会、政治、経済等の構造的な変化。㈤、共産主義と西との斗い、それにともなう権力斗争と戦争の危機、等である。これらをうけてＷＳＣＦはＬＭＣ研究企画の目的を次のように規定している。㈠、現代の世界の状況における教会の責任を聖書の啓示と教会史の教訓を基礎にして再検討すること。㈡、今日の学生という世代に、教会の使命とそれに対する我々のコミットメントに対する基本的動機について新しい、又適当な理解を発見させ、又意見を交換さすこと。世界における急激な変革が要求する教会の新しい方法、或いは機構について分析、理解を与えること。㈢、今日の教会の使命における新しい役割を果すよう学生ならびに青年指導者を訓練すること。㈣、教会の生活と使命の全体をとおして彼らに自らの奉仕の場を発見せしめること。以上が企画のねらいであり、同時にストラスブール会議の目的であった。

さて、ストラスブール会議は以上にもとずく各国での研究、あるいはラングーンにおけるパイロット・カンファレンスに導かれ、又六一年―三年に世界六地域で行われる地域会議等後続する各種の規模の企画を含めてＬＭＣの中心をなすものであったが、この会には以上のような基本的討論とそれに出発して作られた各種の参考書、資料、ワーキング・ペーパー等が、主としてＷＳＣＦのスタッフと会議の指導者として予定されている人達によって用意された。ＷＳＣＦで直接用意されたものとしては、十五冊のＬＭＣ研究アウトライン、三冊のＬＭＣ聖書研究、三冊のストラスブール・ドキュメント及び機関誌六〇年一、二号をそれにあてた「明日の使命に対する歴史の教訓（History's Lessons for Tomorrow's Mission）」で、これは特に総主事のＰ・モリー氏が責任をもって編輯したものである。又、ＷＣＣのヴィサー・トーフト総主事は The Pressure of Our Common Calling（邦訳、菅円吉、新しき教会の生命と使命）を、特に聖書研究に則応してこの会議のため著したし、ＩＭＣのニュービギン総幹事の "One Body One Gospel One World" ならびにＤ・Ｔ・ナイルス氏の "The Preacher's Calling To Be Servant" もテキストに用いられた。又、企画の発展を都度つたえるべくＷＳＣＦの「フェデレーション・ニューズ」が用いられたのは当然である。今ここに「ＬＭＣ研究アウトライン」の各分冊のテーマは問題のうけとり方にいかなるニュアンスがあるかを知るのに面白いから次にあげておこう。ややその意識と表現に問題を感ずるが。(A) イエス・キリストと世界＝基督教には将来があるのか。一体人間の努力って意味があるのか―人間の希望と神の希望、神は支

二、歴史における神 (God in History) マヤンドルフ神父（フランス・カトリック）

三、基督者の生活における聖霊の権威 (The Authority of the Holy Spirit in Christianl Life) R・K・ストラッチェン（米・コスタリカ・福音派）

四、信徒の使徒性 (The Apostolate of the Laity) J・ハメル神父（フランス・カトリック）

D、教会の使命と革新 (The Mission and Renewal of the Church)

一、最初の数世紀間における伝道の教会 (The Missionary Church of the First Centuries) H・I・マロー教授（フランス・カトリック教会）

二、挑戦に対する応答としての宗教改革 (The Reformation as the Answer to a Challenge) M・ジェヴァ教授（フィンランド）

三、キリストと近代における世界 (Christ and the World in the Modern Age) H・ヘーケンダイク教授（オランダ）

四、基督者の召命の三つの契機 (The Threefold Christian Calling) W・A・ヴィサー・トーフト博士（オランダ）

五、聖なる公同教会と諸教会 (The Una Sancta and the Local Church) W・A・ヴィサー・トーフト博士

六、世における聖霊の働き (The Work of the Holy Spirit in the World) D・T・ナイルズ博士（セイロン）

七、父の国は完成せり (The Kingdom of the Father is Fulfilled) D・T・ナイルズ博士

八、WSCFの使命 (The Mission of the Federation) V・ガランド氏（ウルグワイWSCF副総主事）

E、明日の使命 (The Tasks of Tomorrow)

一、基督者学生と現代の挑戦 (Christian Students and the Challenge of our Times) J・デシナー教授（米）

二、教会の前線と世 (At the Frontier of Church and World) H・R・ウェーバー主事（スイス）

三、宗教なき人々に対する基督の使信 (The Christian Message to Men Without Religion) K・ブリス女史（イギリス）

四、マルクシズム社会における証 (Witness in a Marxist Society) E・アドラー女史（東ドイツ　WSCF副総主事）

五、非キリスト教化されている大陸における証 (Witness in a de-Christianized Continent) J・M・ボニノ教授（アルゼンチン）

六、キリスト教とイスラムとの出会い (The Encounter of Christianity and Islam) K・クレーグ教授（イギリス）

七、人種的文化的緊張のただなかにおける証 (Witness Amidst Racial and Cultural Tensions) H・マクル主事（オランダ領ローデシヤ）

八、労働世界における証 (Witness in the World of Labour) 竹中正夫助教授（日本）

九、革新された生 (A Renewed Life) P・モリー総主事（フランス）

F、まとめ

く、報告書を作ってWSCFとメンバーSCMの将来の活動と研究に資するというものであった。以上、これらのアイディアの全体を含めて、この会議を teaching conference と云ったのであった。

四

会議は以上のようなアイディアをもとにして次のような主な形式によって形づくられた。

I、礼拝　毎朝九時より、会議の牧師、ドイツのP・クライジッヒ、レバノンのハジム神父（オーソドックス）、世界YWCAのパルマー女史、セイロンのアシュラムの指導者S・セルヴァレトナム師指導の下に又、夜の祈りは各チュートリアル・グループ毎に行われた。又二回の聖日にはサンジローム教会（ルーテル派）とサンパウロ教会（改革派）で前者はフランスSCM委員長J・ボスク教授、後者はチェッコのロマドカ教授の説教の礼拝があり、後者と閉会礼拝には聖餐式が改革派教会ならびにルーテル教会のトラディションに従って行われ、一同はそれに招待された。又これと平行してギリシャ正教、アングリカン等夫々の伝統に従ってクローズドされた聖餐式が行われた。このようなエキュメニカル会議における、或いはレイマンの会議における聖餐式の問題はむずかしい。今回も会議がそれを執行せず、個々の教会がそれを行い、その伝統に従って会議参加者は招待され、陪餐者は個々の信仰的判断又は同行の牧師の配慮に従って主の卓につらなったのであった。

II、講義　連日一つ乃至二つの講義が行われた。これらの講義は同時通訳と、別に用意された四ヶ国語（英独仏及びスペイン語、これが会議の公的用語であった）の印刷された要約によって補われた。これら講義の題をあげると次のようである。

A、キリストの現実（The Reality of Christ）

一、キリストの世に対する聖業と我らの召命（Christ's Ministry to the World and Our Calling）R・ショール氏（米）

二、人々に対するキリストの聖業（Christ's Ministry to Persons）D・T・ナイルス博士（セイロン）

三、神はかくも世を愛したまえり（Good So Loved the World）L・ニービキン監督（英）

四、キリストの独一性（The Uniqueness of Christ）

但、これは予定されていたスピーカー、チェッコのミレョフスキー氏が病気のため取り止めとなった。

五、救済者イエス・キリスト（説教）（Jesus Christ the Redeemer）J・L・ロマドカ教授（チェッコスロバキヤ）

六、来れ、主イエスよ（説教）（Come, Lord Jesus）F・C・フライ牧師（米・ルーテル教会）

B、この世の現実（The Realities of the World）

一、社会的・政治的革命（The Social and Political Revolution）M・M・トーマス氏（インド）

二、知的革命（The Intellectual Revolution）F・フロレンティン（フランス）

三、科学的革命（The Scientific Revolution）H・リルエ監督（西ドイツ）

C、神の民（The People of God）

一、神の子、神の民、神の世界（God's Son, God's People, God's World）W・A・ヴィサー・トーフト（オランダ）

における個人的コンミュニケーション」、「大都市における諸問題」、「変革しつゝある社会における青年の個人的諸問題」、「大学における伝道」、「エキュメニカル運動、ローマ・カトリック教会とファンダメンタリズム」、「回心、個人的決断と交り」、「神学教育」、「福音派、リバイヴァリズム、改宗主義」、「基督教的育成、神の言とサクラメント」、「社会における基督者の証」、「キリスト教教育と一般の教育」、「職業生活、家庭生活における男女の協力、責任ある市民」、「原子時代における平和」、「教会と宣教団体（ミッション・ボード等）の関係」、「醜くき分裂と誤まれる統一形態」、「芸術と証」、「信徒の使徒性」、「住居を失った人々のうちにおける教会」、「福音と諸宗教」。

V、読書の時間　昼食後五時四十五分までは毎日特別予定されたプログラムはなかったが、そのうち四時半より五時半までは読書の時間として指定されていた　多くの参考書、資料、聖書研究等の読破のために特にこの時間を有効に使うことがすゝめられた。各ゼミナール・グループでは特にその主題に則した書物が準備されていたし、又会議の図書室から、或いは会場に開設されていた書籍店より書物を入手するよう備えられていた。

VI、ドラマ　外国での会議にでて、ドラマのない会議は珍しい。ストラスブールも例にもれず、会議の最初、発題の意味をこめてジャン・ポール・サルトルの「出口なし（No Exit, Huis Clos）」が、又会議の最後にまとめの意味をこめて、アンリ・ジョンの「十字架の途（The Way of the Cross）」が夫々イギリスSCMの会員により編輯されて演ぜられた　夫々実に迫力のあった演出で、前者はその前に行われたショウル氏の発題講演を色あせたものとするほどであった。きくところによるとこのドラマのかわりに、準備の際、日本の椎名麟三氏等のドラマ、又は映画をやろうという話があったそうだが、言葉の都合でやめになったそうである。サルトルといい、椎名氏といい（椎名氏のことについてはどれほど外国の人が知っているかは不明であるが）現在の世界の学生の思想的問題状況をある意味では端的に表現しているのであろう。

さて、以上が大体の主なるプログラムであったが、これに加えて二度のエクスカーションがあった。一度はストラスブールの南西サン・オデールのカトリックの聖地、巡礼地にして、アルサス・ローレン教区長の所在地を訪問した、教区の監督がわれわれに、「主にある兄弟姉妹」と呼びかけて教会の一致を説いたのを感銘をもって聞いたのであった。又独仏の国境線がライン河をはなれてルクサンブールの方へ西に折れる頂点にある国境の村、リーベフラウエンベルグ及びオーベルゼーバッハを訪問した時の全村をあげての歓迎とアルサスの民族衣裳、賛美歌の合唱等心に暖まる機会であった。又会議には先述のバルト教授の訪問の他に、今注目を集めている「アフリカの革命」がひらかれ、パネル討論をしたこと、ロマディカ教授及び助手のオポヒンスキー氏を囲む会、WSCFのかっての指導者、F・ミラー、聖書研究でおなじみのスザンヌ・デートリッヒという老婦人等を囲みWSCFの歴史をうきぼりにしたパネル等があったのを附記したい。この他に又、アジアの代表の集りが二度、同しくタッフの集りが数回、日韓代表の懇談会が一度、町の中国料理店で行われた　これらについては他の方がふれられるであろう。

我らの召命（Our Calling）P・ポッター主事（西インド　新ＷＳＣＦ総主事）

以上の三十一の講演が連日行われたのであるが、五つの大きな分類のうち最初の「キリストの現実」は聖書研究的性格をもっていた。この会議を通して特に聖書研究の時間の設けられていなかったことについて批判があったが、講演のこの部分はＤの後半の講演と共に本来的にそれを充分したものと解しうる。ＢはＳＣＭの機能的に取りくむべき知的、社会的分野の現代的様相に対する分析であり、以上は序説的部分である。Ｃはキリストの業と神の使命を、そこにおいて知ることのできる教会について教会の本質と使命、教会の一致と革新の基礎について、いろんな角度から学ぶのである。Ｄは神は歴史においてこの世界では何をなし給うたか、教会はそれに如何に答えてきたか、答えるべき教会の体制は何所に基盤をおき検討すべきかを問い、Ｅにおいては神のかかる行為に対するわれわれの責任は何であるか、それを世界各地の特殊な状況の中にたたかっている神の民の姿を検討しつゝ明らかにしようと試みたのである。

これらの講義の要旨を本来ならばここに書きしるすべきであるが紙面の都合上略させていただきたいが、それらは他の人々の記事の中にふれられることと思う。これらを通して二三印象に残った点を箇条書にしるすと、Ｍ・Ｍ・トーマス氏の　キリストは現在進行しつゝあるアジア等、世界における革命の主であり、それは我らにその主に対する従順を要請する。我らはこの決断を明確にすることによって革命の主がキリストであることを証せねばならぬ……」。或いはＦ・フロレンティン氏の難解であったが「コンミュニケーションの困難を克服するキリスト」ヴィサー・トーフト博士の「to be, to do, to go の三つの契機の統一に教会の存在は確立されねばならぬ」という主張、ロマドカ教授の「現在チェッコで進んでいる政治的出来事はチェッコの教会に対する神の審判である」との言葉、マロー教授、ジョハ教授の実に生き生きとした教会史の叙述、ヘーケンダイク教授の「キリストの出来事は世俗出来事（Secular event）である。キリスト教は非聖化、非キリスト教化されねばならぬ」という主張、Ｄ・Ｔ・ナイルス博士の「諸君はキリストに本当に出会ったか」という激しいチャレンヂ、竹中さんの講演のあとのわきたつような雰囲気、最後にＰ・ポッター氏の主張した我々こそ新しい存在として創りかえられるべきだという悔改めの主張等。又講演とは別にＫ・バルト教授を囲む懇談会の時のバルト教授の温顔と「伝道・証とは福音に学ぶことである」と静かにのべた教授の信念、おゝよそ日本で想像していた教授とちがった印象など未だ生き生きと残っている。なお、これらの講演の要旨（英文）はＬＭＣＣ事務所（ＹＭ同盟学生部）に用意されているから有志は申し出られたい。（一部百円）

Ⅲ、チュートリアル・グループ　グループは国別、教会別等を考慮して十五人から二十人によって構成されて二週間を通じて毎晩集った　その目的は講義の内容の消化、会議の主な主題の理解、聖書研究にあてられた。

Ⅳ、ゼミナール・グループ　ゼミナール・グループは会議を通じて午前に六回集り、参加者の特別に関心のある題目にわかれ、夫々専門的指導者による指導をうけた。これらのグループの主題をみると具体的に参加者の問題をもっている世界的スケールでの問題点がわかる。それを列記すると次のようである。・プロパガンダの時代

政治的、経済的、社会的、教派的状況の相違をこえたコンセンサスであり、われわれが一つの神、一人のキリストを信じ、一つの教会に属するという一つの信仰――それは一つの上から与えられたものである――に基ずく協同理解である。

なおこれらに附加して少し言及したいことがある。その一つは、会議に集った学生のミッショナリ団体、諸教会のみならず基督教学生運動自体に対しても強烈に提出されたインスチチューショナリズムに対する批判である。これらは決して思慮の浅さ、無責任からくるのでなく、その使命がより信仰的、効果的に運ばれることを願ってのそれである。彼らにとって組織・制度の固定化は伝道の最大とは云わぬまでも、相当の障害となっている。これらの批判的態度は教会に対する真の姿とその使命に対する確信から、又主の命令に従わんとして新しいあり方を探求する熱心からきているのである。

しかし、既にのべたようにいろんな不満はあるがTeaching Conference という方法について特に大きな批判がなかったことである。teaching つまり study ということが今日ほど深刻にその必要性の感じられたことはない。このことはSCMの将来にとって重要な契機を意味すると思う。第一のようなはげしい批判的態度の出たのはこの会議を通じて中心的課題が「教会の存在理由」、もう少し正確に云うと「教会の世における使命」という課題であったからであろう。教会の生命とは世のための生命である、ということである。このことは何回もくりかえされ承認されたのであるが、特に我々の諸教会、SCM、伝道団体が世に対して、その本来の関りの姿を再構成し、真の生ける対話をすること、それなくしては使命ということは考ええないのである。と同時に我々の語った世とは、単的にいって世俗の世、そこには不快な斗争、分裂、等々、たんに世界の表面をおゝっている諸現象のみでなく、人間の心のふかみでおこっている実存的な出来事の深みでも把握された世である。しかるに、この世が又、同時に神の世 (God's World) として理解されるのである。それは我々一人一人に内面の問いを発するものである。それ故、我々は世と本当の対話に入り、世と歴史の声に我が耳をすまし、それを神の我々に対する審判として、又不忠実なる我々僕に対する神の言葉として聞かねばならない。このように自分自身に対して批判のやいばをむけたこと、高踏的に止ることなく、共に生きようと願ったところに会議の重要な稔りの一つのあったことを覚えていただきたい。

以上、会議の全般的な姿をできるだけ客観的に伝えるのが本稿の使命であったが、それらは極めて表面的であるし、又会議のもつ参加者、諸教会、又SCM、WSCF自身に対する意味も、本来それが主体的なものであるかぎり、極めて不適当な叙述であると思う。しかし、今後来るべき年に我々は協同理解の線にそって、それぞれの国の教会の具体的状況に応じてどのように発展さすかは我々の使命であることは明らかであるし、日本の諸教会の将来はこのことにかかっていると思う。日本の教会の一致の不可欠―緊急事とは参加者の胸の中におこった確信である。

（日本基督教青年会同盟学生部主事）

以上が会議の全貌であるが、その会議の発展につれて我々がとりくんでいる「教会の生命と使命」の問題の全体はまことに広い内容を含み、三十有余の講演を中心とする会議の全プログラムをもってして充分に包含しきれぬものであることが次第に明らかになってきた。そのためたびたび会議の内容は「自分たちの問題に触れない」、「理窟ばかり多くて実際的でない」等の参加者の不満がきかれて、会議の方向づけに疑問をもつ指導者さえあったときく。最近筆者のあったジェネバにいる世界YMCA同盟主事も、同時期に開催されたローザンヌでのWCC青年会議で、一つのコンセンサス（一致点）を出したのに比して、実際的でなかったとの批判をしていた。たしかに新しいミッション・クルーセードのための新しい基督教イデオロギーとかスローガンを期待していた者は失望したであろう。ある者はTeaching Conferenceと云われながら自分の特別の問題に何ら解答を与えられなかったと不平をもらし、かえって混乱が深くなった、或いはフラストレーションが増大したと云うだろう。たしかに、ストラスブールは何らかの理論的結論、あるいはコンセンサスを或る人々が期待するように生みだしはしなかった。むしろ、それが本来的であるかもしれない。しかし会議を通して今日の世界の只中におけるイエス・キリストの証のむつかしさと必要性について真剣にぶつかる学生の新しい意志とそれ故にこそ起るプログラム、あるいは講師達に対する学生の真実な対話と反応があったのも事実である。これがいかなる稔りをもたらすかは予断を許さない。しかし、ストラスブールが今後のSCMと教会の生活の上に深く作用する何かを生みだしたと云いうるのではなかろうか。

さて、しかはいうものの会議がすゝむにつれて、共通して明らかになってきたいくつかの確信がある。それらはある意味でコンセンサスとも云うべきものであろう。それはおよそ次のようである。

一、キリストは教会の主であるとともに、この世と歴史の主でありたもう。

二、このキリストの主権は世のため十字架に死に、復活して昇天し神の右に坐し給うキリストのそれである。キリストはこの在り方において主権をつらぬかれた。

三、このキリストの働きは、今日、聖霊の業を通して現在的である。

四、基督者はこのキリストによって呼び出され、新しき生とならしめられ、世俗の中に聖き生活を実現し、世に対するキリストの主権を証する使命をもつ。これが基督者の訓練でもある。

五、教会はキリストの身体であり、その肢である信徒は、聖霊の器として、キリストの代理として世にいでゆく。そこで奉仕の業を全うし、よって教会は全き姿で存在せしめられてゆく。

六、諸教会はかかる使命を果すため、その形式に根本的改革を必要とする。この改革の方向は、教会はこの世に対して与えたもうた神の愛の故に存在するが故に、そのきわみまで愛したもうた世の要請によって方向づけられ、それは教会一致の方向をめざす。

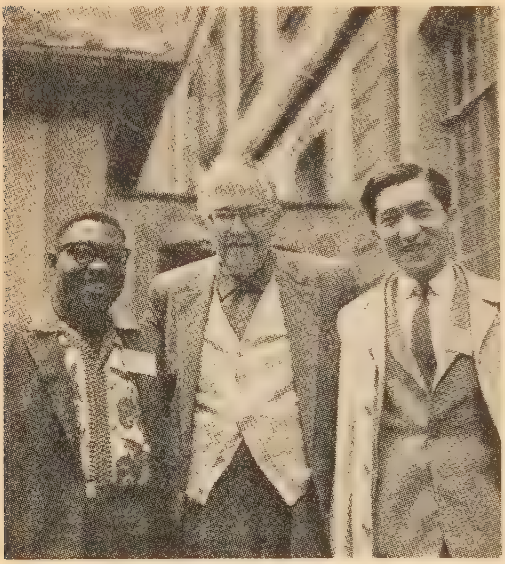
七、この改革は諸教会に対してのみならず、教会の肢であるSCM、WSCFそのものにむけられなくてはならない。

八、今や、変革の時代に、その変革を主のものとするよう、福音をのべつたえる緊急の時である。

以上が会議に出席した人々の、人種的、言語的、思想・文化的、

新しい世界を背負って立つべきキリスト者学生に対する教授の深い愛と期待によるものであろうか。

教授の訪問をより意義あらしめるため、各分団協議会では、それぞれ教授への質問について協議した。私の属した分団でも、十六日の夜の会で、これがとりあげられた。議長のポール・リンバート世界YMCA総主事の指名によって、現在、バルト教授の下で、親しく博士論文の指導を受けている前福岡在住で、九州学Y委員としても奉仕してくれたジョン・ヘッセリンク宣教師（WCC青年部代表の資格で参加したが、終始日本代表団と新しいシムカを運転しつゝ行動を共にしてくれた）が、「カール・バルトの人間と神学」と題する、まことに要をえた報告をし、協議に展開した。ヘッセリンクさんは、論文がすんだら日本に帰って、〃いわゆるバルト神学〃を非神話化したく願っています。」とその報告をむすんだのだった。



右端　塩月賢太郎　WSCF主事と　中央　バルト教授

会議の主題が「この世に対するキリストの聖務とわれわれの召命」であるだけに、アングロサクソン系の学生や、指導者の中から、「神の全能と人間の無力」をモティーフにするバルトの立場は、社会倫理に不毛ではないかとの激しい疑問も表明され、教授の訪問は一層緊迫した空気の中で迎えられたのであった。

各分団からの質問は、運営委員によって、大きく四つの分野にまとめられ、進行役のヴァルド・ガランドWSCF副総主事が、英語でそれを一つ一つ読みあげ、それに教授がドイツなまりの英語で、ことばを一つ一つを吟味しつゝ、一言一言おさえるように、時には机をコツンコツンとたゝきながら、時には、パイプの煙りに目を細めては答えたのであった。会議の公用語は、英、独、仏、西の四ヶ国語であり、同時通訳の設備もとゝのっていたこととて、ドイツ語で答える方が教授には容易であったと思われるが、そうしなかったのも、特に会話を必要とする英語圏からの代表達のためを思う思いやりからではなかったかと或る人が言っていた。この四つにまとめられた教授の答えに対する関連質問は、場内から自由になされたが、フランス語での質問には、（アフリカからの学生は、何人も勇敢に前へ進み出て、たくみなフランス語で質問した）流暢なフランス語で、ドイツ語のそれには、（アジアからの唯一人の質問者、インドネシアの学生はドイツ語で質問した）教授は大喜びで、実に力強いドイツ語で答えたことだった。

質疑応答の内容は、いくらかでも日頃教授の思想にふれている我

ストラスブール世界会議でのバルト先生

本行孝司

開会第五日目の七月十九日は、会議の全参加者にとって、とりわけ忘れることのできない日となった。七十四才のカール・バルト教授との親しい対話の機会に恵まれたからである。プログラムには組まれていなかったこの思いがけない贈り物のしらせを二日前から受け取った参加者は、様々な感慨と期待とを持って、この日を待ったのであった。

午後の自由時間の中に組まれた二時から四時迄のこの二時間は、参加自由とのことであったが、もちろん七百余名の全員が、さしもの広いストラスブール大学工学部講堂の二階迄を埋めつくして待つうちに、教授は、しぶいブルーのシャツにネクタイもつけず、ベレー帽といったスポーティないでたちで到着した。わきあがる拍手に、ニコニコ手を挙げてこたえながら、ヴィサー・トーフト博士、レスリ・ニービギン監督、フィリップ・モリー総主事ら、現在エキュメニカル運動の第一線の指導者達で、教授の直接、間接の弟子にあたる人達にかこまれて最前列に進み、D・T・ナイルズ委員長らと固い握手を交して、ゆっくり太いパイプに火を点じた。教授の忠実な秘書であり、我が国には、蓮見和男訳「キリスト教女性観」の著者として知られるキルシバウム女史も、その小柄なからだでつきそっている。

教授自身のことばによれば、その残り少い余生を、「教会教義学」の完成に捧げて、一切の余計な社交的なつきあいを断念し、バーゼルからは、ほとんど外に出ない教授が、全く例外的に、国境をこえてこのフランスの地までわざわざ足を運んだのも、過去半世紀の長きにわたり、或いは指導者として、或いは親しい友人として、われわれ世界学生キリスト者連盟と共に歩んできた、切ることのできないつながりからでもあり、また、これからのキリスト教会を、いや

端に起因する。しかし、地獄を福音と切りはなしてとりあげてはならない。福音が先行しているのだ。しかし、地獄の問題は、キリストが来りたまわねばならなかった程、深刻な問題なのだ。悪魔についての定義は不可能だ。ただ存在していることはその力によって知りうる。悪魔とたゝかう方法は、ルターはインクをぶつけたが、私も多分インクを使う。たゞし「教義学」を書くのがそれだ。未信者は地獄に行くかって。信仰がなければ、私が亡びることは、はっきり云えるが、他の人については何とも云えない。私は証言しているので、証明しているのではない。共産主義者のためにさえキリストは死なれたんだよ。」「最後の(4)については、この質問の出所は、ナイルズ君臭いね。証し人とは、キリスト者として存在していることと、単にそこにいるだけで、或いは眠っているだけでさえも証し人になっている。伝道者（エヴァンジェリスト）は、教会が、決して自己完結することなくたえず改革されつゝ、キリストの和解を告げることに参与する者である。宣教者とは、教会が、この世に対して常に開かれた存在であり、決して自己目的化していない時に、人を招き、求め、世に出て行く、動的なあり方のキリスト者である。この三者は切りはなして考えてはならず、常に一つのことゝして理解すべきである。教会も、キリスト者も神の国の告知のために存するのだ。」と結んだ。

予定を三十分も過ぎて、立ち上ったこの世紀の碩学に、全参加者は起立して今後の健康を祈り、尊敬をこめて拍手をし、足ぶみもこだました。深く、幾度もうなずいて応える教授の澄み切った眼ざしは、一人々々の胸に刻み込まれた。壇から下りた教授をいくえにも囲んで、各国の学生、指導者たちがあいさつに参まり、三十分も立往生の形であったが、一番前の席をしめていた日本からの参加者も、ヘッセリンクさんの紹介で、教授に心からの感謝とあいさつを送ったのであった。「ア・ア・ヤパーン。」「外の人達、一寸待ってくれたまえ、日本の友人達に先ずあいさつしなくちゃあ。」と、文字通りの特別の親しみをこめて、私共一人々々と握手し、話題はあわたゞしく、あちこちに飛んだが、九大の滝沢先生の名前が出た時、教授の顔は嬉しさをかくしきれず、語調を強めて、「洗礼を受けたと聞いて、とても嬉しい。」「組織神学の講義もしているなんて、ワンダフルだ。」と我々の肩をたゝいて云われたことだった。「このヘッセリンク君を、もうじき神学博士に仕上げて、再び日本にお返しするよ。」と目を細めて弟子をいつくしむ教授だった。

変りやすいアルザスの空から、いつともなしにそぼ降り始めた小雨の中を、車中の人となった教授は、さもうるさそうに肩の高さまで手をあげ、手のひらを、おいでおいでをするようにひらひらさせながら、遠くバーゼルに去って行った。七百名の学生、指導者のうち、再び教授に接することのできる人達は、わずかであろう。しかし、教授に親しく接したあの感慨はいつまでも消えないのではなかろうか。

（学生YMCA九州駐在主事、現在ユニオン神学校留学中）

々には、ことさら新しいことではなかった。しかし、教授の立場を非常に固定的にしかとらえていなかった参加者の多くは、教授の、自由でこだわらず、好々爺ともいえる風格から湧いて来る生き生きした考え方に、どうも勝手がちがったというようなとまどいを感じ、もう一度彼を勉強してみる必要がありそうだと語っているものさえあった。

主な対話の内容をひろってみると、次のようなことになるのではなかろうか。どうも心もとない話だが、ニュー・ヨークにやって来てこの六ヶ月、外国語のむずかしさに絶望的にさえなっている今、ふりかえって、教授の使われた一言一言の意味の重さ、広さを、暗号めいたメモをたよりに再現することは、全く無謀というより外には考えられぬ。しかし、教授の誠実な語りかけに応えずに沈黙してすましてはならぬように思われる。あやまちを恐れつゝも、私なりに教授の志した方向を指ししめすことが私に課されているのだ。

四つの分野に分けられた質問は、(1)「神の国の到来に対する人間の貢献について。」(2)「今日、我々が直面する問題にとる政治的行動は、キリスト教的に基礎づけられるか。」(3)「人間の罪。亡び。悪魔。地獄。肉体の復活について。」(4)「証し人、伝道者、宣教者のちがいについて。」といった大問題ばかりであった。

(1)について教授は、きっぱりと、「神の国の到来は、神の一方的な行為であって、人間の行為と混同することは決してゆるされぬ。しかし、人間は、恩寵によってあたえられる神の国を指し示し、それを反映することができる。そして指のさし方には、一般的なスタイルはない。各々が、そのおかれた場所で、具体的に、さししめし方を決めるのだ。」と答え、(2)については、「キリストは、教会の主、宗教的場面のみの主でなく、全世界の主であり、政治的行動をも支配する主である。勿論、政治的行動は、人間的なもので、自由、正義平和をもたらす人間相互の協力である。神は主権者であるが、忍耐に富みたもうので、(こう云って教授は実に美しくニッコリ微笑した)我々は、くいあらため信じ、また正義のために奉仕する余地があたえられている。キリスト者が主につかえるのと、このような政治的な奉仕をすることとの間に差はない。しかし、政治的立場が一つの主義となる時、常に人間を神にする危険を持つので注意しなければならない。人の生命の源は、神に依存するので、人の生命が大切にされ、弱いもの、子供が大切にされる政治は良い政治である。その反対は、悪い政治である。しかし現実には、この両者が混在しているので、こちらの政治は天使的、あちらのは悪魔的ときめつけてはならぬ。」と答え、関連質問として、アフリカの学生達より「共産主義について」「ナショナリズムについて」質問があり、教授の基本的な態度がくりかえされたが、「私から、模範解答を求めてはならない。君の信仰のはかりにしたがい、情況に応じて、はっきり君自身が決断すべきだ。」と幾度も繰り返した。キューバからの学生が、激烈なスペイン語で、「自分は革命に参与しているが……。」と演説をぶったが、彼に同情的な口調で(この時、通訳の都合で左側に席を占めていた一群の南米の代表者達は、盛んな拍手をした)ありながら、答えは君のみが出せるのだときびしく答えた。開会第一夜に上演されたサルトルの「出口なし」に関連して問われた(3)について、「これは、やっかいな質問だ。政治の問題の方がまだましだ。」と笑われ、「人間は、他との関係なしに人となることはできない。隣人との断絶、これが地獄であり、神からの分

主権であり、この在り方において、キリストは、その主権を確立された

3、キリストのこの働きは、今日聖霊の業を通して働いている。

4、キリストの身体である教会と、教会の肢であるキリスト者は、聖霊の器として、世のために生かされたものである。キリスト者は、世俗生活において、聖き生活を実現しなければならない。

5、教会は、その使命を達成するために、その伝道のありかたに反省と改革を必要とする。キリスト者は、キリストのみこころを実践すべきものとして、神の民とよばれるべきものである。教会の制度的固定化への批判と反撥がみられたが、教会の外に出るのではなく、教会の中にいることに疑いをもっているのではない。しかしさらにめざめたものとして、単に、消極的批判にとどまらず、つねに建設的なものでなければならない。

◎カール・バルトとの質疑

会議の一日、著名な神学者カールバルトと質疑応答の時間があった。一八八五年生まれのこの神学者は、予想以上にすっかりふけこんだという感じをうけた。神のめぐみと、神の国のために人間が努力することとの関係についての質問に対して、かれは、「神の国は神が実現するのであって神の国は人間の努力の対象ではない」ことを強調し、また「教会はこの世に対して開かれていなければならない」と語り、ユーモアをまじえながら、二時間以上にわたって質問に答えてくれた。ぼそぼそとした声でよくききとりにくい点もあったが、親しくその声に接しえたことは、大きな収穫であった。バルトが健康を維持し、『教会教義学』の完成をなしとげることを祈らずにはおられなかった。バルトもいうように、人間のいとなみの結果が神の国となるのではない。神の国はあくまでも彼岸的なものである。しかし人間は、何にもしないのではなく、神への感謝の生活として、神の国に向って、神の国に方向を与えられて努力を続けるべきである。

◎大学におけるキリスト者の使命

ヨーロッパでは、大学の中心は、神学部であったし、今もそうである。大学における礼拝堂の存在もその一つの象徴であろう。それに比して、日本では、神学部をつくることすら大きな問題となってきた。たとえば同志社大学に神学部をつくることは戦前では不可能であり、戦後やっと実現された。大学においては、キリスト者は、学問をするだけでなくキリストの信仰に支えられた生活をすることが大切である。若いキリスト者たちが、ヨーロッパでも、社会や大学や教会の現実に不満をもつ場合も多いが、単に批判のための批判ではなくまた教会の外に出るのではなく、キリスト者の使命感にたって行動する意気にもえているものがいる点は学ぶべきであろう。（日本基督教団名古屋御器所教会牧師）

学生として感じたこと

鈴木伶子

ストラスブール会議をふり返ってみて、あの膨大な内容を思い浮べると、その気になりさえすれば、どのような結論でも引き出せるようにさえ思われるが、一番印象的であったのは旧弊打開の意欲と改めて真実なものを見出し再確認しようとする勇気であった。はじめのうちはその大胆さに圧倒されてしまったり、既成のものは全て、教会も含めて、破壊しようとするのではないかと怖れたりしたほどであった。このように大胆に問題を取り上げられたのは、一つは学生という比較的制約

ストラスブール　会議に出席して



ストラスブール雑感

土岐林三

ストラスブールは、フランスとドイツの国境に近く、ライン河に沿っているフランスの町であり、有名なアルベルト・シュヴァイツアーが、若い日を送った大学の町である。美しい教会が、高くそびえ、キリスト教の伝統、西ヨーロッパ文化のあしあとがしのばれる。七月下旬というのに上着やスウェーターを着ていて丁度よいような気候であった。会場はストラスブールの大学であったが、建物が散在しており、毎朝の礼拝は、市内の各教派の教会堂でおこなわれ、礼拝が終って会議へ行ったり、会場の移動などで、毎日少くも一里位歩きまわった。名古屋では経験しない運動を毎日くりかえしたわけである。

会議は、次の四つから構成された。

一、三十二あまりの講演

二、二十一のセミナー・グループ

三、分団協議、毎晩八時半から十時ころまで講演や各自の問題について、十人から十五人位のグループで話しあった。

四、礼拝

このほかに多くのインフォーマルな集会があった。会議の内容は、大別して三つに分かれる。

一、聖書および教会の伝統に即して、主題について学ぶこと。

二、現代の思想的、社会的課題との対決において主題を検討すること。

三、各自がおかれている具体的状況の中で、一と、二において学んだことをいかに適用するかという実践的課題について検討すること。

会議の全体の主題は、「世に対するキリストの業と今日におけるわれらの召命」であったが、会議の全体を通して、いろいろの角度からの研究や検討が試みられた。政治的立場のちがいや言語の違いなどいろいろな障害はあったが、福音こそエキュメニカルなロゴスであることが確認された。会議の全体をとおして行なわれた主張は、だいたい次の点である。

1、キリストは、教会の主であるのみならず、歴史と世界の主でありたもうこと。

2、キリストの主権は、世のために十字架に死に、復活して天に昇り給うたキリストの

ストラスブール会議の中のいくつかの講演はこの意味で非常に感銘深いものであった。あなた方はキリストに出会ったかという問がくり返して発せられており、教会がキリストに唯一の基礎を置くものであることが強調されていた。またキリストにあってこそ、キリストに従って世の中へ出て行き、主の御業をすることができることが語られていた。講演の要旨が英語でプリントされているが、それを見ていつも文章の中に大文字の使用が多いことに驚いたものだったが、大文字の使用頻度にあらわされる様にキリストとか神とかという言葉が重要視されくり返されていたのである。それだからこそ、キリスト者が教会とこの世の中にあって大胆に働いて行くための方向づけもできたのであろう。革命的変動を各方面から勇敢に取り上げてキリスト者としての責任ある態度をとることが促されたのもこのためであろう。教会の問題にしても、旧い制度的束縛を破って生命の満ち溢れた自由な教会にしようという態度が明らかであったし、信仰も生活上の雑多な要素が交ってあいまいなものになってしまわないように、ただ神への信頼を強めようとされていた。この世的なものに融け込んで妥協するのでもなく、世間から離れて神聖なものとして存在するのでもなく、真の姿を保つのは人間の業としては非常に困難であり不可能でさえあるかもしれないが、ただ教会の中心に主がいまし給い導き給うことを信頼して進んで行くことが求められている。

この方向が具体的にどのような形にあらわれるかは今後の課題として残されている。何らかの形での新しい運動や形態がとられることが良いのか内面的な改革が必要なのか又はその必要はないのかは真剣に神の前に聖書に問われなければならない。特に日本という若い国にあって、政治的にも社会的にも他国との関係においても独特の問題を持ち、思想面でも宗教面でも他の根強い流れが存在し、更にキリスト教界にも無教会という独特の立場があって絶えず教会に問題を投げかけて来るというような外部からの問題を多く抱えている教会の進路は慎重に考えられなければならない。

しかし、学生として、同時に責任ある信徒として私達ができることは何であろうか。まず第一にもっと神学的な訓練を受ける必要があるということは痛感した。ストラスブールでも感じたことだが、とかく私達学生は安易に神学用語を使ったり、自己主張の裏づけのためにどこかの神学者の説を引用したりして満足していることがあるのではないだろうか。その反面、学問的な根拠を全て否定する狂信的な学生が勢力を持つ傾向もある。このような学生キリスト教運動の弊害を改め、更に日本の教会に対して一人々々が誠実な貢献をするためにも、しっかりと神学的な訓練を受ける必要があるだろう。さしあたり、学生として、その立場に基き自由に信仰が強められ、真の神の御心を知るためにもっと聖書研究を行う必要があると思う。教会に対しても無責任な発言で他の信徒を慌てさせておいて刺戟を与えたのだなどといい気になるような浅薄な態度をとることなく、聖書に聞いた神の御心を正しく把握した誠実な真摯な信徒となるためにも、謙虚な聖書研究を行う必要があるであろう。

ストラスブール会議の成果に関しても一部にはかなり極端な用語や形態論も出ていたが、日本でこの問題を展開していくにあたっては、決して一部の流行語や提案などで新奇を衒うことのないように注意して行きたい。欧米の発想であるからといって排除する必要はないが、反面追従する必要も全くない。福

のない者の集りであり、進歩的意見の持主が多い青年の団体であることも大きな原因であろうが、それにもまして、キリスト者であるがゆえに大胆に問題を扱い得たのだという事を考えさせられる。会議中にも度々語られたことであるが、ただキリストによって、私達が生かされ、働かされているという信仰に基き、主が究極的な真の教会の基礎となっていたもうことを確信していればこそ、積極的に「教会」の問題と取り組めたのである。

講演では主としてキリストの主権という事を聖書学的にキリスト論的に掘り下げ、私達の生活が主なるキリストに従ったものであるかを省りみ、更に社会的・政治的・知的変動の意味をキリスト者としてどのように受け取り、どのように対処してゆくかを考え、そのようなキリスト者の群である教会の生命と使命を知り、真の姿を現わすように、あらゆる殻を破ろうという方向をたどっていった。このような講演の流れと同時に、現代の社会とその中にある教会が面している問題を多方面から取り上げていた。セミナーでは小人数でこれらの問題が各方面から検討され、参加者の間でも折にふれては自分達の教会の問題が語られたり意見を交わしたりされていた。毎日発行された会報には連日、コンゴ・キューバをはじめとする政治的変動のあった国の様子が、その国からの参加者によって書かれており、会議の参加者の他国に対する目を開くと同時に、講演で語られることを現実面で考えるための助けとなっていた。変動し、混乱しているこの世界を冷静に見つめ、正確に分析する時に、神がキリストを通してこの様な世界に働きかけ給うた事実を改めて考えさせられる。この世界を悪や誘惑の権化としてではなく、キリストが来り給い、今も支配を続けてい給う世界として認識し、神が一人子を給うほど愛しておられる世であることを知る時、この世界は私達の真実な対象となり、この世の中でのキリスト者の生き方や、教会のあるべき姿を追求することができるようになるのである。けれど、このことは決して易しい事ではなかった。この世界は、今までもそうであったが、現在も決して侮ることのできない力を持っている。特に現代という変革期にあって、この世の持つ不安や混乱に巻き込まれないことは非常に困難である。狼のような世界に小羊の群であるキリスト者が入って行き戦をいどむ時、その群の中心に牧者がいなければ羊が敗北することは明らかである。

この意味で、ストラスブール会議を含めた「教会の生命と使命」の企画は重要な問題と同時に、一歩誤れば取り返しの困難な危険な問題をも持っていると思う。事実、ストラスブール会議でも、末端の部分には危険の感じられる部分も出ていた。教会の問題を考える時にさえ、世俗的な価値判断や相対主義は絶えず顔を出してくるのである。例えば、分団や個人的な話し合いの中でしばしば教会が生きた力を失っているという言葉が語られる時、教会員の数の減少や教会が社会的な生活の中心ではなくなったという事実が、神からの福音が語られていないという事とイコールであるような錯覚を起すことがあったのではないだろうか。教会の問題の真中にまでも微妙な形で入り込んでくるほど、この世の力は強いのである。キリスト者は既にキリストによってこの世を恐れる理由は取り去られているが、同時にキリストによってこの世と妥協する必要も取り去られている。この世の知恵をもって思いわずらうことなく、神の国と神の義を求める事が大切である。絶対的なものを知ってこそ、現代の世に生きる事に意味を持ち積極的に真摯な態度で世界の問題を考えることができるのである。

一つではなく、従って各々が会議に対して抱いていた問題意識も思い〳〵のものであったと考えられる。指導者達によって提出された問いが、参加者によって応答され、さらにローカルな段階で広く深く呼応されてこそ、この会議は機能を充分果すことになると思うのであるが、その意味で、参加者が指導者の問いに対していかなる問題意識の下にいかなる応答をしたかが重要なこととなると思う。「教えられる」側の事情を考えることがここに問題的となる。

　ヨーロッパ的世界と見做しうるヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア等の諸国、アジア諸国、アフリカ諸国、ラテン・アメリカ諸国からの参加者は、夫々の歴史的制約から夫々独自の共通な意識構造をもっている様に思われる。さらにごく大まかに言えば、ヨーロッパ的世界の諸国とそうでない国々との間には一つの明確な歴史的な相異が存する。ヨーロッパ的世界はキリスト教とその教会がなかったならば、今日在るを得ていないといえよう。キリスト教とその教会は、今日のヨーロッパ社会において欠くべからざる役割を果しているのみならず、何ら文化を持たない異邦からヨーロッパ的世界を育て養ってきた歴史的形成力なのである。一方、他の国々に於ては、すでに自己完結的に文化が存在していたといないとに拘らず、ヨーロッパ社会と結びついたキリスト教との邂逅によってはじめて福音がキリスト教の福音として目ざめたという事情が存している。これらの歴史的諸事情はさらに複雑に働いて参加者の会議の意義の認識と問題意識とを規定している様に思われる。そして、参加者が夫々このようにして規定された問題意識を以って、いろいろな角度から与えられた会議の主張をいかに反撥し、いかに受入れるかを検討する中に、いろいろな対話の場において、応答が形成されたと思う。

　私個人が会議の意義をいかなる形で認識していたか、又いかなる問題意識をもって参加したかも、日本社会の、又そこに於ける教会の歴史的諸事情によって多く規定されていたといえよう。私はまず一キリスト者学生として、指導者の方々に「教えられる」ことに会議の意義があると考えた。それと同時に、この会議が、或いはこの会議の母体であるWSCFが日本にとっていかなる意味を有するのであるか。WSCFを誕生させ、今日まで発展させてきたヨーロッハを中心とする諸教会、諸国の歴史的事情、また今日のWSCFを支えている世界の諸教会、諸国の事情が、日本の教会ひいては日本の国を未来への展望に立って考えるときに如何なる意義を有するかなどを常に課題として念頭に置き、会議で取り上げられるいろいろな事柄に結びつけてこれを考えようとした。そして又一方、日本が、現在から未来への姿勢をとるWSCFにとって如何なる独自の貢献をすることができるかについて、手さぐりででも何かを感じ取りたいと考えた。

　会議の指導者達の主張の出発点と思われるところの「我々が、教会の世に対する責任を新たに考え直すべき時にあることの認識」が何に由来するのであるか、は私にとって問題なことの一つである。常に試練の中に置かれて、世との戦いの中に証をすべく努める教会に於ては、いつの時にあってもこのような認識が保たれているのであろう。殊更この認識がここにとりあげられていることは、温室から急に試練の中に移されたために起きた異常な切迫感によるのではなかろうか。教会が自明な存在であり続けてきたヨーロパにおいて、科学・芸術の自立に際して文化全般が革命的様相を帯び、世俗主義が力を持ってき

音に依ったものかどうかを確かに見きわめ、建設的に展開して行かれるように望んでいる。霊ではじめたものを肉で仕上げることがあってはならないと思う。(津田塾大学学生)

ストラスブール会議に教えられたもの

滝浦　満

ストラスブール会議(WSCF World Teaching Conference on The Life and Mission of the Church)は、その名の示す様に「教える」ことを目的とする会議であった。会議の始まる前に、特に神学を修めているわけではない日本の一学生にとっては殆ど消化不能と思われるほど質量ともに尨大な資料が与えられ、それに基いて準備する様に期待されたことや、三十余の講演が連盟の指導者によってなされ、さらにそれらの講演を一層よく消化するために毎晩分団協議が催され、さらに又テーマ別にセミナーが持たれたという会議の構成などは、この「教える」意図をよく反映したものと思われた。従って、ストラスブール会議について反省するときに、そこで何を教えられたかについて、まず考えるべきである様に思われる。

「教える」という言葉は、まず知っていることを告げ知らせるという意味をもつ。さまざまな民族的・教派的背景とパーソナリティを持ちながら、共にWSCFの中で協力しておられる指導者の方々は、夫々に独自の姿勢と発想をもって、同時にWSCFという共通の一つの立場に立って「教える」こと、知っていることを告げ知らせることに努められたのである。連盟の議長であったセイロンのD・T・ナイルズ博士は、その講演の中で、「あなたはキリストに出会ったか」と聴衆に厳しく迫ったあと、「いかにすればキリストに出会えるだろうか。出会うためにはまず相手を認知できねばならぬ。イエスを認知する道は、福音を学ぶこと以外にない」と、さらに「人間として一段と責任ある生き方をするためには、我々の生の基盤が我々自身の内に属するのでは不充分である。それではキリストは我々にとって第二義的な余分なものとなってしまう。イエスは、我々の問いが応答されるに適切な高さに達しない限り、応答を与え給わない。」と語って、現代の世界に生きる信仰者個人に、また教会に、伝道的であると同時に新しい、未来への展望をもった示唆を与えられた。その他多くの神学的講演、又それに基きそれを補う社会学的歴史学的講演、共産主義社会、イスラム世界などに於ける証についての講演などを聴き、或いは叱咤され、励まされ、慰められ、又深い洞察と明快な考察に魅せられつゝ、豊かに教えられたのである。これらの講演の中で示された会議の主張は、我々が教会の世に対する責任を新たに考え直すべき時にあることの認識を出発点としていた。この基盤に立って、教会が自らを世から隔てて自己完結的になることなく、世の中に置かれた自己の位置を正しく自覚して、世に進んで入り、世とのコミュニケーションの回復を求めること、これこそが教会の使命であり、またこの使命が正しく行われているところにこそ生命が充ちているのであるとの主張が強調され、又いかにしてこの課題に現実の場で取組んでいくかが多くの面から考察され、検討された。

ストラスブール会議は、このようにかなり明確な指導理念に貫かれていたと思われる。一方、会議の参加者は、夫々独自の背景の下に、殆ど全世界から集って来ていた。人々は一様に「教える」会議のために集ったのであるが、この会議の意義についての認識は当然

もっとスムーズに、しかも楽しくプランが立てられ、学生は学生のやるべき他の仕事を、より効果的に行うことができたにちがいない。

このようなことをストラスブルグ会議の、私の属したグループで話し合ったことがある。「現在学生運動で最も必要で、そして欠けているものは、学生自身のこのような働きと力である。これを学生だけでやっている沖縄のSCMはほんとうにすばらしい。」と各国代表は云っていた。

ストラスブルグの会議に代表を送ったから、たゞちに沖縄のSCMが変わるとは云えない。それは沖縄に限ったことではない。強いて変ったと云うなら、WSCFに対する会員の関心がきわめて強くなったこと。そしてWSCFからの文書に注意を向け、日常の活動においても、絶えず外国のことを思い、できるだけ広い視野で行動していこうとする態度が一層強くなったことをあげることができるだろう。しかし目に見える変化は望むべきではないと思う。なぜなら沖縄には沖縄の過去の歴史、現在の運動を守り育てた歴史があるのである。しかしその歴史性、社会性にのみ執着せず、世界に目を向け、無限に伸びてゆくことを沖縄の学生は望んでいる。こんなとき、世界会議に参加できる機会を与えられたことは大きな喜びであった。そして意義が大きかったと信ずる。今まで紙の上のことのように思われたことも、解決できなかった問題も、各国代表とじかに話し合っているうちにはっきり姿をあらわしてきたように思われる。もはや私達は、私達の問題を沖縄の中だけで解決しようとは思わない。世界に数多くの兄弟姉妹があることを覚え、彼らが私達のために真剣に祈っていることを信じて、最善と思われるものに向って進む決意を新たにするのである。進度はきわめて緩慢であろう。迷ったり、考慮したりしている状態、不安の状態にあることは決して失望を意味しない。それは問題を意識して動く積極性をそのうちに秘めているからである。その中にある静かな、そして真剣な前進する力は否定できない。

世界の学生が、歴史性と社会性を超え無限に開いた視野に立つことを目標としなければならない。だが現在の段階としてやはりその歴史性と社会性を認めなければならない。そして各々の立場からおわされた使命を果しつつ、世界に貢献しなければならないと思う。

沖縄SCMは沖縄の特殊性を生かしながら、WSCFの目標とするものに向って進み、主の証しを続けてゆくだろう。「世界会議」は私達の目を開いた。

（琉球大学　学生）

（二六頁よりつゞく）

ゆくべき使命を知って、キリストと共に、この世界へと出てゆき、キリストがその弟子達の足を洗われた如くに、世界の仲間に仕えるのである。ヴィサー・トーフトは再び、吾々はキリストの使命を吾々のものとして受け、それを世界の仲間との関係に於て、反覆、継続すべき事を語っている。教会は、全ての人々の所へ出てゆき、全ての国民に仕えるべく召されているのである。かくして教会は、本来、世界に仕えるものとして、この世界にあって、宣教の教会であるのである。

（日本聖公会京都聖光教会司祭、学生YMCA協力主事）

たことが危機意識を生み、このような発想を生むに至ったのではなかろうか。とすれば、これはヨーロッパ的な発想である。従って、歴史的事情を異にする他の国々に於ては、この認識をこのまま自己のものとして受入れることは不可能であろう。そこでは、この認識が、たまたまヨーロッパ的世界の歴史の中に体現されてはいるが、より普遍的な福音の本質に係わる事柄であることと、世界が狭まり、政治経済面の連携が強められ、文化の接触が激しくなって、世界の国々が一つの世界史の中に共存していることの二つを契機としてはじめて、自己の問題に還元してとりあげることができるのである。

エキュメニカルな視野を発展させていくということは、確かに世界の諸国の、諸教会の事情を知り、互に理解を深めることでもある。しかし、より本質的なことは、ローカルな段階に於て、自己に与えられた場にあって、十字架の福音の下に自己の生を生き生きと生きることにあると思う。このような復活のキリストに生かされた生が呼応するところにこそ一致が生れるのである。

連盟の総主事であったフランスのフィリップ・モーリ氏は、会議の終りに総括の意味で「A Renewed Life」と題した講演をされ、その結論として、「このような教会の Renewal は可能であろうか。人間的に言えば、否である。しかし我々はキリストの復活と聖霊を信ずるのである。」「このような Renewal は世にとって何らかの役に立つのだろうか。人間的に言えば、否である。しかし我々は、教会の Renewal は人々をイエス・キリストにある喜びに充ちた信仰に導きうること、そして神は我々の無益な奉仕を、諸社会を変えるために用い得給うことを信ずるのである。」と語られた。これは会議の一つの結論であると同時に、WSCFの新しい出発点でもある。そして又、我々の日本に於ても、多くの場において、我々が現在から未来への展望に立つ時、常に我々の姿勢となり得ると考える。

（一橋大学学生）

ストラスブルグ会議が沖縄SCMに意味するもの

野原輝子

沖縄からストラスブルグ会議に代表を派遣する機会を与えられたことの意義は大きい。沖縄SCMの誕生以来、私達は多くの困難な問題にぶつかってきた。私達の弱さを感じつゝも、お互いに励まし合って、祈りを通して、真剣に考え、問題を解決してきた。Student Worker をもたない沖縄の大学内でのキリスト者学生の活動は、多くの困難をともなうものである。学生だけで事務的な面から活動まで一切を運営して行かなければならない。しかも学生は四ヶ年で学校を去らねばならない。しかしそれは教会の協力がないということではない。聖書研究やグループ研究会、伝道講演会などを通して、多くの牧師や大学の講師の援助を受けてきた。また米人宣教師の協力も大きかった。ところが今一度「運動」とは何かを考えずにはおられない。一番困難を感ずるのは外とのつながりにおいてである。そして外とのつながり、それをいかにするかこそ、今のSCMにとって大切な問題なのである。

昨年アジア地区の書記であるフランク・エンゲル氏が沖縄を訪問された。数名の学生が集まってエンゲル先生を迎えることから送る時までのプランを作製した。授業のあい間を利用してやる仕事に多くの時間を費した。そして費用の収拾を「いかにせん」と案をねった。その時もし Student Worker がいたら

改革者たちは「神の言葉のあるところに教会がある」ととらえた。具体的には、釈き明かされる神の言葉としての「説教」と、目に見える形で示される神の言葉としての「聖礼典」とにおいて、教会はとらえられる。

ここですぐ、一つの問いが提起されよう。改革者らは聖書が神の言葉だという命題を固執する。それならば「聖書があるところに教会がある」とはどうして言わなかったのか。かれらは、単に聖書がそこにあるというだけ、あるいは聖書がそこで読まれているというだけでは、教会の目印にならないのを知っていた。神の言葉は非常に具体的に音声として耳にひびいて来なければならない。目で見、手で受け、口で味わい、歯で噛むという形で示されて来なければならない。

さて、説教と聖礼典とを司るのは教職である。したがって、実際問題として、ここから教職中心主義が出て来た。けれども、この教職中心主義は、カトリックのそれが往々にして持つ教職の特権意識という方向へは発展せず、むしろ、教職の持つきびしい負い目の意識へと発展した。現代の問題は別として、改革主義の教会は長い時代にわたって、教職に対し最も高度な訓練を課して来た。学問的にも道徳的にも、教職は最高のものを要求され、しかもそれを誇りとすることは許されなかった。そして、教職が信徒に対して優位を占めることは認められなかった。

けれども、神の言葉を釈き明かす任務は、その独自性を侵害されない。そのころの一つの教会規則では、レーマンが説教をすることを禁じている。そのころのレーマンは、むろんさまざまの程度の相違はあるが、神学的教養において相当に高度な人が多くいたことは、改革者の書物の出版状況からも察せられる。知的にすぐれていただけではない。殉教者も多数出た。要するに立派なレーマンが多かった。それでも、かれらは教会では低い位置に甘んじた。この制度が今日も固定して残っていなければならないかどうかは全く問題である。けれども、制度の奥にあるものへの洞察は今日も保持されなければならない。それは、御言葉を語るものは霊の賜物においてそれを果たすのであり、単に自己の確信や、会衆からの信任によってそうするのではない、ということである。

教会は神の言葉を中心として、まずファンクショナルにとらえられる。そこで、その中心点がはっきりする限りにおいて、教職のファンクションも生きて来るし、信徒のファンクションも生きて来る。したがって、それはもし、教職中心主義となれば生命を失うし、逆にレーマン中心主義にすると、やはり生命を欠いたまま趣向が変るというだけのことである。中心はどこまでも神の言葉でなければならない。

しかし、神の言葉を中心とするとき、もはや単にファンクショナルにだけ教会を考えることはできなくなる。神の言葉そのものが、神と人との関係状況におけるダイナミックスであることはたしかであるが、単にそれのみでなく、実体的なものとしてとらえられる。救いのメッセージは、非常に具体化された聖餐という実体的なものをともなってこそ、はじめて力をもつ。終始ここで追求されるのは「キリストのからだ」である。教会がキリストのからだである、というとき、それはファンクショナルなものとしては処理し切れない、サブスタンシャルなものを主張している。



改革主義の教会観

渡辺信夫

ただいま「教会の生命と使命」委員会は伝統的な教会論とそれのよってくるところの聖書的根拠を明らかにすることによって、「教会の生命と使命」を今日の情況で探求しようとしている。その一環として、昨年十二月十五日開かれた第十九回の委員会では、渡辺信夫氏の主題に関する発題にそって話し合いがおこなわれた。こういう形で「学生キリスト者」に収録するに際しては、渡辺信夫氏に、話し合われたものを参考にして、書き直して頂いた。なお、話し合われたものはテープから再録して編集部の責任においてまとめたものである。(編集部)

宗教改革において二つの系統の教会観が成立した。一つはルター派のそれであり、一つは改革主義のそれである。ここでは後者が取り上げられるが、わたしはこれを、この神学的伝統の代表者であるカルヴァンによりながら論じて行きたい。しかし、カルヴァンが実際に十六世紀の状況の中で実践した具体的項目を取り上げるのではなく、その後四百年を経た今も一つの伝統的な原理として生きているものを探りたいと思う。そこでは、正しく言うならば、カルヴァンの意見というものはない。カルヴァンは長い連鎖の一つの環にすぎない。カルヴァンは、この連鎖の創始者という意味ではなく、これの最もよい代表者という意味で取り上げられる。

それでは、カルヴァンをも含めたこの一群の神学者の共通の原理はどこにあるか。そこに共通原理としての一つの超越的原理を指摘することは、すでに広くなされている。わたしはそれに反対しないが、もしこれが、超越的原理の展開がある段階まで行ったとき、教会論が成立するというふうに解される恐れがあるならば、その見解をなくすために、超越的原理などということは、言わないほうがよいと思う。むしろカルヴァンたちは、形式論からではなく、実質的に――すなわち、聖書の釈きあかしを積み上げることによって――教会論を成立させているのである。

わたしは、ここでは問題を三つに限りたい。一、何をもって教会と言うか。二、教会とこの世との関係。三、教会の一致。

教会は教会であることによって、すなわち、ある面ではこの世に対して否定的な「この世から」の性格を厳格に維持することによって、かえって「この世へ」「この世のために」の性格を生かす。

この世に対し、教会はどのように関わって行くか。それは、まず教会の主・この世の主であるキリストへの奉仕において方向づけられる。そして、キリストへの奉仕は、キリストがそうでありたもうごとく、自己目的的にならない。排他的・自己保存的な行き方はしりぞけられる。

ブーツァーにはじまり、カルヴァンに受けつがれた教会の体制の一つに「教会は貧しいものに奉仕をする」ということがある。愛の実践団体としての自己意識である。しかも、そのような意味での「献金」あるいは「ほどこし」が「聖餐式」の中で行なわれたということは、象徴的である。すなわち、主がその心を開いて最も奥深い秘義を与え、教会が最も深い意味で成立する場、その聖餐式の場において、教会は貧しい友のために心を開き、奉仕者としてのつとめに目覚めるのである。主が徹底的に貧しくなりたもうた前に立ち、また「貧しきものは常に汝らとともにあり」という事態を覚えるとき、キリスト者は富むことができなくなって来る。そこで実践される愛は、誇りや自己満足を生むことなく、ただ負い目として果たされるのである。それはヒューマニズムの慈善にはるかにまさった強靱さをもっている。

貧しい人をつれに覚えるとき、必然、社会正義が問題領域に取り上げられる。もしそれを黙視して、貧民救済だけをしていたならば、所詮安価な同情と自己満足に終るほかないであろう。それゆえ、この教会の伝統においては、程度の相違はあるとしても、社会の正義を要求することが常になされていた。

けれども、世はつねに正義の要求に耳を傾けるわけではない。そのことからも、教会はある意味で世から孤立する。しかし、孤立の位置は「とりなし」の位置である。教会は自分自身の弱さとさまざまな事情とのために、なすべきことを何ひとつ行なうことができないこともあろう。けれども、とりなしだけは最後までできる。これが基本線である。

教会の一致について、カルヴァンは改革者の中で最もよく考えていた。それは、かれが狭いセクト意識をうけつけないだけの広いヒューマニズム的人間形成をしていたからでもある。しかし、カルヴァンはヒューマニスティックな意味でではなく、固有の意味での教会論の方向として、教会の一致を考えた。すなわち「キリストは一つ」ということに徹頭徹尾即した態度をとろうとした。

教会は元来、一致においてしか存立しない。教会論は、つねに「一つなる教会」を論じることとしかできない。しかも、現実には教会の分裂がある。そのとき、一つなる教会を論じることは抽象についての抽象的説明にほかならない。観念の世界でのみ妥当する一致を考え、現実には不一致を肯定する例も多い。しかし、ひとりの主に即してことを考えようとするとき、かれがまさに主でいましたもうことによって、教会の一致はもはや観念のものではなくなる。それは、われわれの服従の課題となってくる。しかし、この主に即して考えるとき、今ひとつのことも明らかになって来るであろう。それは、そこにある「一つ」が隠された「一つ」だということである。かの日が来るまでは、これは隠されている。教会の一致はあくまで

改革者たちは、説教と聖礼典を教会の目印と呼んでいる。しかし、目印ならば、他のしるしに置きかえることができるかもしれないし、実在は必ずしも目印を必要としないとも言える。改革者たちがあえてこの二つを固持したのは、これが単に目印、認識根拠であるよりも、むしろ実在根拠として、教会の実体をそれが形成するからであった。

しかし、この実在根拠はつねに反復されなければならない。説教と聖礼典が繰り返されてこそ、そこに教会が建つのであり、一回だけの説教で持続的な実体が生じるのではない。むしろ、実体の持続性が「反覆」によって否定されるところに、新しい意味での持続性が生まれる。教会はそのようなものとしてのみ伝統の担い手になることができる。そして、そのような意味においてカルヴァンたちは、ルター派よりもより積極的に伝統の重要性を認めたのである。

ところで、神の言葉の繰り返しの伝達が、そのようにして、神の言葉による教会の実体の断絶を意味するものであるならば、教会の実在は、むしろ実在的なものとしてとらえられる。この点がカトリックの教会観と対照的である。しかしカルヴァンは教会の実在をすべて実存に還元しようとはしない。実体の継続する面も追求される。それは「交わり」である。

けれども、交わりはキリストとの交わりに根拠をおくところの、キリストにおける交わりでなければならない。最もまさった意味における交わりは、説教と聖礼典における交わり、礼拝のための結集である。したがって、教会を礼拝団体として理解することは最も重要である。そこにこそリアリティーがある。なぜなら、そこにキリストがいましたもうからだ。もろもろのリアリティーの中で惟一真実なリアリティーたるキリストにあずかるとき、人はこの世のリアリティーと対決するに耐えるものとされて、この世の中へ散解して行くのである。

第二の、教会とこの世との関係について。

カルヴァンの論理には「区別されねばならないが分離されてはならない」という形式が好んで用いられた。教会と世との関係もこの論法をもって表現される。両者の区別についてはルターもカルヴァンも同じように強調した。しかし、カルヴァンはより強く「分離されてはならない」と主張する。ルターにある「二つのレギメント」の考えは、カルヴァンにおいてはより弱い。したがって、カルヴァン派では、政治と宗教の問題にしても、単に政教分離というだけでは表現しつくせない内的な関連をとらえており、それがしばしば、世界史上に「革命的エネルギーとしての宗教」の範例を打ち出して来た。

さて、教会と世界との関係は、どこまでも教会の主・世界の主としてのキリストにおいて考え抜かれねばならない。そこで、これをもし図式化するならば、近年よく言われる「同心円」的構造となるであろう。ただ、同心円という場合には、内側の円と外側との円との調和が予想されるが、カルヴァンたちはこの二つの円を同一平面上で一部相覆うものとは見ていない。いうならば、次元の相違があり、内側の円の延長は決して外側の円に結びつかない。むしろ、内側の円と外側の円との矛盾、外側の円に対する内側の円の審判的・否定的性格が、かえって両円を並存させていると言えるであろう。

ことは教会の自殺行為である。時代が変って来ているからである。しかし、時代の推移に即することが、はたして教会の固定化を防げるであろうか。それは教会を柔軟にするかもしれないが、むしろ骨抜きにするであろう。常に時代に即する教会は、世のためにいけにえとして生きる団体ではなく、世を利用して生きる経営体である。教会の柔軟性は時代に対する謙遜からでなく、神の言葉に対する謙遜から来る。神の言葉によって、常に砕かれ、改革され生かされるところに、教会の強靭さと時代に対する敏感さが生まれるのである。

改革主義の教会観については次の書がすぐれた参考書である。Wilhelm Niesel: Das Evangelium und die Kirchen. 2 Aufl. 1960 Neukirchen.

発題をめぐつて

北森　問題が大きいので発題者の線にそって話し合い、時間があったら、ふれられなかった面も尋ねることにしたい。

宮本　人間的伝統の否定ということですが、神の言を中心に教会を考える場合、神の言が語られ聞かれるところに教会があることになり、上との関係で何か点的な断絶を思わせる感じがする。而も教会が、Substantial な身体として理解されるが教会の制度的な面が下の方に継続されている面もあるわけですね。無教会ではそこを否定すると思うがどうでしょうか。

渡辺　私もそこをつっこんで考えたいが、改革者の理解にも、教会は下の方に残っているという考えはある。けれどもそれは、キリストがリアルに伝達されるというところに生命があり、カトリック教会の考えるように生命が教会の固有財産になってしまうという風にではなく、伝統といってもキリストから受けるという理解である。それ故繰返し説教とサクラメントが必要であり、その切れ目にも生命は生きているという把握の仕方であったと思う。

宮本　教職の権威の問題で、御言を語る権威というところはわかったが、教会を身体と理解するところで教職は身分的なものになるのか。

渡辺　私の理解では、本質的には身分にならないが、たゞ教職の任職をサクラメントとはみないが、或る程度そう見るので身分とはいい切れなくともそういう要素はある。

宮本　夏の教職講習会で何の気なしに身分のことにふれたが、教職は身分でないと、田舎での伝道が出来ないといわれましたね。

速水　教会は神の言を中心にして立っているといわれるのですが、それがローマ教会のオントロギカルな教会観の中にある教職中心

発言者（発言順）

北森嘉蔵（東京神学大学教授・LMCC委員長）
宮本武之助（東京神学大学教授）
渡辺信夫（日本基督教会・東京告白教会牧師）
速水敏彦（立教大学チャプレン）
李仁夏（LMCC協力主事）
N・サーバー（LMCC協力主事）

終末的期待である。隠されたものを人為的にあらわにすることはできない。

したがって、教会の画一的統一は慎重に回避される。それは見ずして信ずべきことがらを、信じなくとも見えるものにすり替えてしまうからである。カルヴァンたちは、ついに教派統合の方向には向かわなかった。各国において、それぞれの事情に即した国民教会が作られる。それらを統一するインターナショナルな信仰告白は編まれない。例えばルター派が万国共通の統一的信条を固持し、聖公会が英本国における信条や儀式をそのまま外国に持ち込むのと比べて、カルヴァン派はたしかにちがっている。

けれども、それは、信条が結局は各個人単位に細分化されるという意味ではない。そのような考え方は敬虔主義以後のものである。教会は公同性において立つ。個人単位に解体することはできない。しかし、公同性は決して個性や特殊性を拘束し、窒息させるものではない。そして、その特殊性は主として地域的・民族的特殊性の意味であった。では、今日、同一地域内に教派の多様性があってよいかどうか。それは宗教改革時代の基準をもっては論じつくせない。なぜなら、社会とそこに住む人の意識との構造が違っているからである。その当時は一地域一教会という原則だったから、今もそうでなければならないとはいえない。

それにしても、それぞれの個別の状況は、来たるべき一致を指さしていなければならない。それは告白の基本的一致のための努力となって現われる。その努力をこの四百年間にわたって最もよく実行したのが改革主義の教会だったことは認められてよい。そして、改革者の中でもカルヴァンは、ローマカトリック教会のもつ教会性を、その苛酷な批判にもかかわらず、否定しつくすことをしなかった。宗教改革は一面、教会史の断絶ではあるが、一面、なお継続という意味をとどめている。ここに、カトリックともう一度話し合う余地が残される。エキュメニカルな考え方の有力な支えがカルヴァンに求められるゆえんである。

教会の一致は、しかし、上部構造における一致ではない。むしろ、下部における、各個の教会の地域的・日常的な営みの中での問題である。一つの教会の中で、互に重荷を負い合うように、一つの教会と一つの教会とが互に重荷を取り合うところに、教会の一致が真実に目指される。一個の教会の問題を、その教会内にのみ閉鎖しておいて、あとは一飛びに一致へと飛躍することは、観念の遊戯とそしられてもやむをえないであろう。個別の教会がその公同的方向づけを、具体的にはどのように持つかを考えないで、教会の一致を論じることは危険をはらむといえよう。

改革主義の教会は、近世思想の舞台となった西欧地域に成立した。そして四世紀間にわたって近世思想の尖端とつねに交渉を持ち続けた。それだけに、近世が審判されるときが来れば、最もきびしくさばかれるであろうところの神学を身につけている。それについてわれわれは、一時代前の人よりは一そう深く意識的にならざるを得ない。しかし、改革主義は自己固定化に対する内的な戦いを常に継続して来た。その伝統を再確認して、これを今、最もよく生かすことがわれわれの課題になっている。

問題は、自己固定化を破壊する極め手として、教会は何を持つかである。たしかに、今、教会を一世代の古さのままで固定化すること

る。今のプロテスタントの神学で問題なのは実存的なものと、実在的（Das Reale）―実体的でなく―なものとの相互関係をどうしていくかということである。ルターは実在的なものを実体的にきりかえたので問題であるが、ブルトマンのように全部実存的にするのも問題ではないか。

サーバー　別の話になりますが、御言を説きサクラメントをおこなうことが教会の徴であるとおっしゃいましたが、御言に服従する面を云わなければならないと思う。又サクラメントに聖霊が働くことについて、ペンテコステの日には、サクラメントも御言を説くこともなかったのに聖霊が働いた。それはすでにそこに教会があったということにはならないか。教会における聖霊の働きの意味について御意見をうかゞいたい。

渡辺　改革教会の伝統の中では、聖霊はやはり御言において働くという。

サーバー　御言によってか、御言を離れて働くといったのか。

渡辺　御言を離れては働いていないとカルヴァンはいったと思う。その言の云われたのは、アナ・バプテストの時代であるので、その言がそのまゝ今日うけいれられるのには問題はある。

北森　二つ聞きたいが、教職の権威の問題でカリマスの権威をいっておられるが、K・ホルは改革者にカリスマ概念はないといっている。カリスマはむしろ、カトリック的であり、それを打破したのではないのですか。ホルは教職の権威を秩序から説明している。御言の宣教をゆだねられている責任から、神学教育をし、検定をして按手をする。それだけの秩序をふまないと御言に対しこの責任を負わせられないという。ホルは特にルターにおいてこういっているが、カルヴァンはどこでカリスマのことを云っているのか聞きたい。

渡辺　その場所は今指摘出来ないが、使徒行伝の註解に出ていたように思う。

北森　カリスマはカトリックの述語的なもので、聖霊の賜物にプラスアルファーがあり、それは所有されるものでもあり、聖職の按手において半魔術的に伝わるものであるのか。カルヴァンは単なる聖霊の賜物という意味でいっているのであろうか。

渡辺　そうだと思う。

北森　もう一つは同心円という考え方であるが、私はあれに疑問を持っている。クルマンも同心円といっていると思うが、さきほど云われた「とりなし」の祈りということは同心円で考えられないものをすでに含んでいると思う。強いて図式化すれば外側は四角にえがくべきである。教会という内側とは矛盾しているところがある。世はキリストのレグヌムであるが、キリストに反している面がある。反抗性とか否定性が同心円ではあらわせない。「とりなし」ということは、世が否定性をもっているからではないか。それ故同心円という考え、従ってクルマンには前から疑問を持っている。

渡辺　私もそう考えてはいたが。

宮本　その点で、ＬＭＣＣはキリストの主権ということを外側の世に対しても主張して来たが、その外側に対する主権の面ではどうでしょうか。内と結びつく面があるか。

北森　ＷＳＣＦはヴィサー・トーフトであり、クルマンもそうであるが、イージーな面がある。

宮本　ＬＭＣＣはそういう印象を与えている。今迄、外側が四角ということは出て来なかった。これから厳密に考えていくことになっているが。聖書を学ぶと、この世に対する責任と奉仕ということが出て来ると思うが、その結びつきが、同心円ではキリストに於て

に対する批判としてはわかるが、教会が御言を与えられる場合、その御言はキリストとおき代えられないか。

渡辺　ええ、そうなんです。説教はキリストを伝達する手段ですから。

速水　プロテスタントの贖罪論はよくわかるが、教会観はぽつんと把握され、何かそこに継続するという面がかけているのではないか。初代教会の例をとって見ても、教会は共同体としてキリストに養われるが、同時に共同体の信仰が聖書を生むというところがあったのではないか。そしてそこでキリストと聖書を結びつけるものがあったのではないか。

渡辺　キリストと聖書を結びつけるのが改革者の特色であった。聖書をキリスト論的に意味ずけている。

速水　その場合の教会の役割は何か。

渡辺　私の理解ではカルヴァンが教会論のはじめのところで「キリストの恩寵の受領のみのりとして教会が出る」と云っている。

速水　言が与えられる時、そこにすでに教会があるのではないか。

渡辺　あるという風に、そこに教会の継続がめんめんとしてあるというのでなく、垂直に神の言が与えられる面が主に考えられている。

速水　そういう風に上から御言を与えられて教会が生れるのか。

渡辺　生れるというより御言が語られる現実が教会である。

李　今の質問は聖公会でいう教会は、キリストの受肉の継続であるという立場から云われるのですか。

速水　いや受肉の継続であると云い切ると危険になりますが、教会をオントロヂカルに考えていっている。

サーバー　教会は旧約のイスラエルの継続というところからも云えますね。

速水　そうなんです。神の言の語られ聞かれる面のみを強調すると教会は断続的で、カトリックの云うように公同の教会とか、使徒的教会という意味がわからなくなる。

渡辺　宮本先生との話し合いにもありましたように、そういう面もありますね。かつての教会と今の教会の全てを含めた教会のカソリシティーは認めている。

宮本　その場合、キリストの支配というところから継続が考えられないか。われわれの立場から云えば危機的であるが、その点ローマ教会の危機感はどうだろうか。

速水　ローマ教会のことは知らないが、アングロ・カソリックのロックスブンディーの系統ではそういうことを云っている。併し、見ゆるかたちのサクセッションを云っているわけで、その点は私もよくわからない。

北森　改革者自身はその問題を充分考えていないのではないですか。さっきオントロヂカルといったが、むしろ実体論的という方が適確であると思う。これは所謂 Corpus Mysticum Cristi という中世的教会論で、そこには Mysticum という実体論的な考えがある。それはアリストテレスから来て、中世の神学にしんとうして、教会観を形成している。そしてこれは、危機というか実存的なものが稀薄である。存在の学から教会の学まで支配した面があり、そういうものに対して改革者はプロテストした。特にルターは骨の髄まで中世人であるので、新しい時代の人であると同時に古い時代の人である。カルヴァンはかれとは余程違う。ルターは聖餐論で新しいことを展開したかと思うと実体論的になる。それをカルヴァンが、どれだけ克服したかに興味があるわけである。かといって中世的なものを全部否定して、所謂実存的になるのが、神学的に正しいか否かは別の問題であ

今日に於ける大学の課題とキリスト者の使命

小樽堅二郎

こゝに掲げる一文は昨年十一月京都大学基督教青年会六十周年記念講演会で取り上げられたもので、現代の画一化、平均化傾向による個別性の危機と、他方では高度の技術化に伴う分化によって作り出された統一性の危機とに、我々学生キリスト者として、現実に生活している大学の場でどう関わりゆくかを中心点としてディスカッションしたものである。一人の学生発題に続いて、三人の先生方に自然、人文、社会科学の立場から話して頂き、それを土台として話し合ったものである。

我々が社会生活を営む時には厳密に考えれば、いくつかの問題の連関性の中に立たされているのであって、特に共同体は多面的に相連関した諸関係より成りたっているので、一つの領域の中にのみ生活する事は寧ろ誤りと云えよう。現代の数多くの分化した状態では全体を有機体として捉える事は非常に困難ではあるけれども、この困難を悩む事無くしては真実なるものを求め得ないであろう。

信仰と社会科学がどう連関するかについては信仰は信仰の領域とし、社会については社会科学の領域に分ち各々の立場を二元的に考えようとするのが支配的である様である。社会科学には対象を経験記述的に扱う面があるけれどもその対象となっているのは主体性をもった人間であって、勿論人間にも量的に理解され得る面がある訳だが、それを成りたゝしめている主体的側面が切り離され、しかも尚リアルに理解され得る事が可能であろうか。技術的なものと、存在論的なものとをどこ迄明確に分かつ事が出来るか、換言すれば没価値をどこ迄成し得るかが問題となろう。

自然科学の構造を考えてみると、自然科学は一つには実際生活に対してプラクティカルでなければならない面と他方には原理としての科学の面があり、この両者の関係は本来的に原理を追求する事が真にプラクティカルであると云う事に裏打ちされているのでなければならない。又しばしば科学はそれ自体を絶対化しようとする傾向があるけれども、例えばその中の統計的事実が如何に正確であり得ても、決してそれはリアリティーを意味しはしないのであって、逆に云えば科学と云うものはどうあろうとリアリティーを問題には出来ない限界のある事を知らなければならない。更に又他の科学に於

呼ばれている。しかし四角に対する場合にキリストの主権とはどういうことであるのか。

渡辺　同心円的な考え方がいけないという北森先生の御意見はその通りであると思う。

北森　教会はキリストの僕であって、なお死にいたるまで罪人であり、その点否定面も考えられるが、それはすでに義とされた罪である。しかし、世は僕であるべきであるが、キリストの敵でもある。N・T・はローマ帝国をそう見ている。その二重性が外側の円に出て来るべきである。

渡辺　LMCの考え方は同心円的だったわけですね。両者がよく調和していますね。

北森　ヴィサー・トーフトですからそうでしょう。

李　世はたしかにキリストに敵対しているが、なおキリストの現実に立って見るならば世が円に包まれている面がある。世は敵であるが、愛されているというところにWSCFの主張があるのではないか。

北森　それはそうですが、やはりそこには西ヨーロッパ的考え方がある。ヨーロッパ即キリスト教という考え方がある。日本の現実は大変異ると思う、大学を考えてみても、教会の設置した大学の歴史と、日本の大学は違う。そういう反キリスト的性格、今李君のいったように一ではあるが」という面をもつと云うべきである。

宮本　四角の中心は円の中心と同じでしょう。

北森　そうなんです。それでは時間が過ぎましたので、委員会の考えていた線に大変よく沿って話していただき、良い発題をいたゞいて感謝しています。

（六四頁より）

を告白し、或は告白していると思いこみ、自らを神なきヒューマニストとよんでいる人々に対する我々の態度についても、そのまゝいえることなのである。この場合にもまた、我々は、彼らのうちの強さであり真理であるところのものをたずね、そこに於てキリストの主権が明らかにされることを、求めるのである。

以上の問題提起は、たしかに不充分であり、粗雑であり、簡略に過ぎよう。しかし、我々が見当はずれの受けとり方をしているのでないならば、キリスト教会の内外に、伝道の業の新しい理解へと我々を召し給う、神からの動きがあり、ざわめきがあるのは事実である。神の教え給うところを、よりたしかに受けとめ、神の御用のために、神によって新しくされること、それが、WSCFのプロジェクトにとって重要なことなのである。

と客体性の中に、自己を止揚しようとする矛盾を起している。これは近代的人間主義に含まれる神に背いた人間の姿ではないだろうか、我々がキリスト者として、真実に神の福音に立ち、云わば神のヒューマニズムに立脚する生き方を回復するのでなければならない。

所で現実に我々が送っている学生生活はどうだろうか。実際によ謂わば出来上った科学の専門的な知識を学びとると云う事に追われ、各々が何らかの意味で一つに結びつき得ると云う事が、殆んど実感として起ってこない。全てが技術的なものの吸収に終っている。理科系のみならず文科系の学部に於ても、統計的要素が重んじられる傾向が強く、他学部との結びつきと云う事は殆んど我々の視野の外にあると感ぜざるを得ない。しかし乍ら例えばアプライドサイエンスと云う事を考えてみると日本では科学を原理的なものに限る傾向があるけれども、本来科学に於ては、寧ろ効用が大切なのであって、原理的なものは効用をどれだけ満たすかと云う事によって評価さるべきものである。その意味から云えばアプライドサイエンス自体、創造と云う事に関わって来なければならない訳で、技術的な意味での発明と云う事を常に考えてゆかねばならない訳である。

現在の大学に於ける細分化、専門化の状態は、事実として我々の視野を狭少にし、考え方を固定化して、新しい分野を開拓する意欲を減じ、特に又既存の専門分野のいくつかにまたがる領域の研究を困難にしつつある。そして実際は細分化の反面に於て新しい綜合が行われるべき筈であるにもかかわらず、それが順調には進まない。確かにこれは事実ではあるけれども果して本来学問と云うものはそうなのであろうかと云う疑問が湧いてくる。研究が進むに従って、絶えず新しい、より根本的な問題が現われてきて、それをある程度理解されると、次のより一層根本的な問題が顔を出すと云う様にして研究が進みを示してゆく。一寸考えてみると、それは専門化、細分化の一形態にすぎない様であるけれども、実はそれとは反対の方向への進展の可能性をも常に内蔵しているのであって、ある深さに迄掘りさげると、或る点で思いがけない所に迄つながっているのを発見する。この意味では特に深さが広さを生むと云いうるであろう。相対性理論が、物理学のみならず天文学にも新しい基礎、新しい視野を提供し、宇宙全体の構造とか、発展とかの問題を新しい立場から考え直すに至った事や、原子力学の確立によって、化学に新しい理論的基礎を与えるに至った事柄は、科学の進歩が常に分化と綜合の両面をもっている事を示している。

さて、我々学生キリスト者が、今学びつつある事柄にどう関わるべきであろうか。我々はキリスト者として、客体性の中に自己を止揚するのでなく、将しく神のみこころにのみ限定を受けている。この意味から、学問に対してはあくまで自由である事を赦されているのである。我々は厳しく神の福音に照らし出されて、主体的に生きゆく事を続けねばならない。その意味から、大学はまさに我々の召しを受けた場所なのである。神のよき音信が、一人一人に違った形で与えられる如く、我々の召され方は、個別的ではあろう。従って安心して学問すると云うにはこの事が正しく理解されねばならない。これは正しく自らが主体的に生きてゆく所に学ぶ事への自由が赦されていると云う事を意味している。福音的であろうと願えば願う程、自らが選びとる学問の内へ奥深く立ち入ってゆくけれども、却ってその生活の中から隣人への対話の道が開かれてこなければならない

（京大基督教青年会　経済学部学生）

けると同様に、自然科学は固定したものではなくて、絶えず、歴史的、社会的に発展するものであって、そう云う意味では、我々が現実に学ぶ自然科学自体が絶えず暗中模索を続けているものである。従って事実自身をどの様に再構成してゆくか、どの様な立場に立ってよりクリエイティヴに解釈してゆくかが我々の関心事となるのである。客観性に対する自己をどう考えるか、主体性を持ったものが客観的な事実にどうかゝわるかが問題になるのである。

人文科学の分野から考えてみると、現代に於ては、殆んど社会的な面からのみ人間が捉えられ、個人性が黙殺される傾向が強く全てを社会的なものによって包含してしまおうとする方法が多く、自己に立ちかえると云う事が稀薄にされていると云う事が問題になろう。この様な状況で個人性をどう保ちゆくか、どの様にして個性を回復するかが我々の関心事になってくる。

大学が社会の中にあると云う時、それは社会の中にありながら、尚且それを超えて、社会を批判するものでなくてはならない事を意味するのであって、従って大学で社会的な人間を形成すると云う時、それは一方では社会に適応する性格を養成すると同時に他方、それを超え、社会を批判し得る創造的な人間、個性的な人間形成を意味するのでなければならない。現実には、我々は、現在の大学にみられるマスプロダクティヴな傾向に挑戦してゆく自覚を持つ必要があろう。高度化された社会では、大部分がテクニカルな人間にされ実存的なものを失わしめられてしまう傾向がある。この様な社会では人間は神の似姿であるよりは、機械の似姿におとしめられてしまうのである。こゝに人間が作り出した機械に人間が支配されると云う現代の矛盾がある。

大学とは本来、一つのものに向けられたものと云う意味をもったものであって、幾つかの分野に分かたれた研究部門が有機的な関わりを持つ事により、全体としての目的を、共ににないってゆくものであると云う意味をもっている。しかし現在の大学では各々の分野が専門化して、その為に分化され、全体としての統合、内的統合が失われゆく傾向にある。大学の本来の意味から云って、色々な学部をもっていると云うだけでなく各々の分野を内面的主体的に統一したものを目指し、学問の修得が真の意味で自らの実存を形成せしめるのでなくてはならない。分化されたものを自らの実存に於て統一する方向に、人文主義的、広い意味での哲学的教養が関わりを持つ。種々の科学的体系の違いを自らの内に於て求心的内包的に統一する方向、つまりナレッヂをウィズダムとして選びとってゆく事がなければならない。学問の道は、この意味から云って古典的、人間的なもの、真にヒューマンなものを選びとる事である。現代ではヒューマニズムは無神論的乃至は非キリスト教的なものに思われる様になってしまっているがこゝには問題がある。一体学問が何の為に成されるかと云う事については、真理の為の学問と人類の為の学問と云う事が考えられるけれども、本来的には真理の為にと同時に人類の為と云う事が成されなければならない。クリスチャンにとっては、この事が将に神の権威の為と云うリアリティーを持ってくる。この立場から今日のヒューマニズムに対して考えを及ぼしてみると、今日ヒューマニズムは、ブルヂョワ的か、プロレタリヤ的に分れ、各々の立場では、やはり真理性が歪曲され、真実に歴史的、社会的次元に於て正しく判断する事が忘れられつつある様に思われる。又自然に対して人間がどう関わるかについても、その対象、云い換える

に寄生する存在としてのみ語ることは、ますます無意味になってきている。(勿論中国のように、依然としてこのような見方がついているところはある。しかしその場合でも、もう一方では、「中国の教会の神」への生きた信仰の存在が、はっきりとみられるのである。) インドの基督教、日本の基督教、といったものの存在は、今や、客観的にいっても、相当はっきりした事実なのである。基督教は、至るところでその土地のものとなり、或は、なりつゝある、といってよいであろう。

しかしながら、まさにこの時代にあたって、もう一つのことが起りつつある。ヒンズー教や仏教を、例えば「偉大な民族宗教」として、それらをインド文化の一つの側面としてとり扱うことが、既に時代おくれになってきているという事実である。これらの宗教もまた、世界宗教であることを主張している。ロンドンに仏教の布教師がいるし、三年前、六人の青年が僧となるためにタイに行き、そのうち五人は帰国、更にかたい信仰をもった仏教徒として、その信仰をひろめている。彼らは、神のない宗教を提供できるので、(我々にはできないのだが) ある意味で基督者より有利である。非常に多くの西欧人が、神なき宗教を求めているようにみえるからである。

二十年前、ヘンドリック・クレーマー博士は、「非基督教世界におけるキリスト教のメッセージ」の中で、「基督教と、東洋的な生き方との真の出会いは、まだ起っていない。それは未だ将来のことに属する。今迄なされてきたすべてのことは、予備的なものであり、しかもこの段階をいつぬけ出せるか、誰もそれを知らないのである」と述べた。そして昨年、博士は、真の対決がまさに起らんとしていると論じている。それは、起るとすれば、インド、ビルマ、日本、或は近東に限らず、西ヨーロッパや北アメリカにも及ぶであろう。それら諸宗教の「母国」においてのみでなく、我々の只中に、「伝道地」と限らず、「基督教世界」に於て、いゝかえれば、全世界到るところに、その対決はみられるにちがいない。

そして、どういうことになるだろうか？

他の宗教の信奉者たちは、かつて、基督教の伝道に対抗して、宗教的には全く無意味な、幾多の自己防衛の手段を用いた。我々も又、この新しい事態の中で、それを真似たいという誘惑にかられることであろう。愛国心や、家族への忠誠心に訴え、又「異教」に移ってゆく人々の生活を難しくさせる、というのがそれである。我々は更に、(もしできるならば) キリスト教と、アメリカニズム、又はイギリス流の生き方、フランス精神 (或は他のどこの国でも、それが自分の住んでいる国であり、伝統的なキリスト教国ならば、それでいゝのだが) 等とを、同一視しよう、一部のインド人がヒンズー教に対し、又、アラブ人の一部が回教に対すると同じ態度をとろうと誘惑されるであろう。この種の誤った動きが、「基督教国」である西欧にも、多くみられるのである。しかし、こういう態度は、何らの実りをもたらさないものである。それは、不信仰であるばかりか、一種の偶像崇拝であり、自国の文化を神として、キリスト教信仰をそれに従属させることになるからである。

もし我々が、基督教以外の、復興しつゝある諸宗教からの挑戦に、真に応ずるとすれば、それは、我々とは異る信仰をもった隣り人との、真実な、愛にみちた出会い」という形をとらねばならない。しかも我々はそこで、彼の理論や実践の、弱点を探すのではな

―WSCF―

「教会の生命と使命」と他宗教の問題

基督教以外の偉大な諸宗教が、「宗教的」勢力であった時代は終った、というのが、比較的最近まで、基督者の間にみられがちな態度であった。種々の事情に詳しい基督者たちでさえ、そう考えがちであった。諸宗教は、たしかに一つの社会的勢力ではある。それぞれの社会の生活の中にしみこんだ存在ではある。しかし、その真の価値は失われたし、それらは既に死んでいるものだ、というのである。つまり、基督者は、ヨーロッパにおいてヒューマニスト達がこゝ何十年か、基督教の将来に対してとりつゞけてきたと同じような態度を、偉大な諸宗教――仏教、ヒンズー教、回教、神道、儒教――に対してとってきたのである。

しかし、ヒューマニストも、基督者も、どちらも間違っていたようである。ヨーロッパの基督教に、しかも、「現代の破壊力」によって、信仰の実質が最も手ひどく侵されたと思われるヨーロッパの基督教に、真実に宗教的な信仰の復興が起っているように、他の国々でも又、偉大な諸宗教の中に、新しい生命がみられるのである。かって基督教の伝道によってひき起された動きは、今や、逆方向への動きを、生みつゝあると思われる。過去にも、幾人かの西欧人はヒンズー教に夢中になったし、仏教や回教に捉えられた人達もあった。しかしいまや、そのような偶発的な、特異な個人的回心以上のことがらが、起りつゝあるのではなかろうか。例えば仏教は、布教師を養成する大学を設け、二度にわたる大戦と、第三の、更におそろしい戦争の恐怖を世界にもたらした基督教国の動きに対してなすところを知らなかった基督教信仰から、人類を救い出すために、二千名の布教師を送り出そうという、五ヶ年計画をもっている。インドでは、ヒンズー教が、特に宗教的な基盤から、キリスト教の伝道の是非を、かなりつよく問題にしはじめている。もっと「原始的」な諸宗教に眼をむけるならば、ケニヤにおけるマウマウの叛乱が、彼らの固有の宗教であるキクユの信仰の側からする、反キリスト教運動としての側面をもっていた事実を、否定することはできないであろう。

即ち、我々は、こゝで一つの逆説的な状況に当面するのである。一方では、アジアやアフリカに於て、伝統的な「宣教師による伝道」の時代が、「それぞれの国の教会」によって、とって代られつゝある。基督教を、「白人の宗教」として、又、帝国主義的機構

編輯後記

☆韓国の学生基督教運動における「教会の生命と使命」研究の具体的稔りとして日本の学生基督教運動に提案されてきた相互の交流計画にもとずき、韓国側の招待に応えての六名の代表を送りだした。又去る二月末から三月にかけて開催した「LMCC指導者協議会」に彼国より二名の指導者を迎え、又七、八月には四名の学生を迎えようとしている。彼国でのLMC研究企画の実践課題への発展を覚えつゝ我々の研究が又アジア各国の中にあってユニークな発展と貢献ができるよう努力したい。十二月にはLMCアジア地域会議がマドラスで開かれる。この時を一つの目標に今年の努力を重ねたい。

☆この場所をかりて申し上げるのは恐縮であるが、日本におけるLMC企画発足以来、委員長としての労をおとり下さった北森嘉蔵教授は本月限りで宮本武之助教授へバトンを引きわたされることになった。研究企画、委員会運営、ストラスブール会議への代表派遣等困難な事業を今日まで遂行してこられた同教授に心よりなる謝意を表したい。又宮本教授の今後の指導を心より期待したい。

☆やゝ時期を失した感があるが本号は「ストラスブール世界学生会議」の特集とした。出席者たちには改めて反すうさせられている頃である。その他御多忙のなかに執筆下さった方々にお礼申し上げる。

☆この「学生キリスト者」が読者にどのようにうけいれられているであろうか。お義理に交っている相手なのか、親友ぐらいに取り扱われているのであろうか。最近いろんな批判が加えられてきていて編輯者の耳にいたいものが多い。たしかに本誌の特定の目的のためにも軟柔さを失っている。しかし根本的に私は「学生キリスト者」がこの時代のなかに、ただ一度の生を、あくまで人間らしい人間として生きようと決意している大学人とその運動にかかわる人たちにしみじみと語りかける「ことば」がそのなかからほとばしり、聞きうる雑誌でありたいと願っている。そして、そういう「ことば」のやりとりがお互いを結びつけ、新しい生き方をうみだし、ひいては教会の問題を解決してゆく力となってゆくことを祈っている。人間らしい気持をもってこの時代に生きる心の底からの叫びを、ぜひお聞かせ下さるよう願っている。（H・F）

いのである。(キリスト者の弱点を指摘された時の、我々自身の感情を考えてみよう。)

むしろ、最も長所とされるところ、最も真実であるところを探し、そこに、我らに先だって既に彼らと共にいますキリストをたずね求め、かくされているキリストが、我らとひとしく彼らにも、明らかにされることを、ねがうべきである。パウル・ティリッヒ博士の言葉を借りれば、「我々は、異邦人にもユダヤ人にも言わなければならない。……我々が、あなた方を、イギリスとかアメリカの基督教に、西欧世界の宗教に、改宗させようとしていると思わないでほしい。我々は、あなた方を我々の側に、我々の側の最善のものにさえ、改宗させようとは思わない。そういうことをしても何の役にも立たないのだ。我々はたゞ、我々が見たところのものを示し、聞いたところのことを語ろうというのである。即ち、旧い創造の只中に、新しい創造があるのだということ、そしてこの新しい創造は、キリストとよばれるイエスのうちに成就しているということを、である。」

そして以上のように、偉大な諸宗教に属する人々への態度についていえることは、無信仰

(五八頁につゞく)

昭和三十六年三月一日発行（毎年四回）第二巻 季刊「学生キリスト者」第六号 定価 六〇円 一年 二四〇円（送料共）

THE STUDENT CHRISTIAN

A quarterly magazine published by the Life and Mission of the Church Committee, at the Student Department, National Committee YMCAs of Japan. 2, 1 chôme, Nishi-Kanda, Tokyo
Hajime Fujimori, Editor

Volume 6 **1961**

The focus of this sixth issue is on the Strasbourg World Student Conference of WSCF, 1960

編集発行者 藤 森 元　印刷者 三秀舎　発行所 日本YMCA同盟学生部内「教会の生命と使命」委員会　東京都千代田区西神田一の二 振替 東京 20196
電話 (291) 5201—4